小原B・稲荷遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集

1990

津山市教育委員会

小原（おばら）B・稲荷（いなり）遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集

瓜生原、草加部地区構造改善事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

津山市教育委員会

序　　文

津山市は中国山地の山懐、吉井川中流域に開けた小盆地に位置し、古代美作国府が置かれ、近世津山城が築かれるなど永く岡山県北部の政治、経済の中心的位置を保ってきた。

最近では旧城下町周辺の開発事業が増大し、埋蔵文化財の保護措置が市政全般にとっても緊急かつ重要な課題となっている。

市域周辺部は、おなかつ水田地帯が多数広がり、この部分も近時多く水田構造基盤整備事業が起されるところとなっている。

本報告書の内容である、瓜生原小原Ｂ遺跡、草加部稲荷遺跡の調査もこの水田構造改善事業の実施に伴なうものであった。この水田構造改善事業に伴なう発掘調査については、従来小規模に対応したことはあるが、本格的に本委員会が発掘調査を行ったのはこれが始めてのこととなった。いずれも、実施計画にともない急遽対応したもので、分散した調査形態を取っているため、調査においても、報告書においても全体としてまとまりに欠く結果となった。以後構造改善事業については、事前協議をすみやかにおこなう方向で改善が図られつつある。

これらの調査により各地区とも多数の遺構が発見されており、その遺構の中心は弥生時代の集落跡であった。当時の人々の生活を振り返るかずかずの手掛かりが発見されるとともに、津山ではめずらしい中世の屋敷跡の一部が発見され、これにともない備前焼や石臼等の生活用品が発見された。

なにぶん、急遽執り行った発掘調査であり報告書の内容にも多々不備があるものと思われるが、諸賢の御叱正、御教示を頂ければ幸甚です。

調査の実施、報告書の作成過程において今回も多くの方々に有形無形の御援助御指導を頂きました。末筆ながら厚く御礼申しあげますとともに今後とも御指導御協力頂けますようお願い申し上げます。

平成２年３月31日

津山市教育委員会

教育長　萩　原　賢　二

例　　言

1．本書は、岡山県津山市瓜生原及び草加部地区で実施された水田構造改善事業の実施に先立ち発掘調査を行った瓜生原小原Ｂ遺跡、草加部稲荷遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は、瓜生原小原Ｂ遺跡の確認調査を昭和62年７月21日から昭和62年７月31日まで、本調査を昭和62年８月18日から昭和62年９月７日まで、草加部稲荷遺跡の確認調査は、昭和62年11月２日から昭和62年11月30日まで、本調査はＣ地区を昭和62年12月16日から昭和63年１月19日まで、Ｂ地区は昭和63年７月11日から昭和63年10月27日まで、Ａ地区は昭和63年８月29日から昭和63年10月27日まで実施した。

各調査地区の担当は、瓜生原小原Ｂ遺跡の確認調査本調査、草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区の本調査を中山俊紀、草加部稲荷遺跡の確認調査を安川豊史、草加部稲荷遺跡Ａ地区の本調査を保田義治が担当した。各遺跡の地番は瓜生原小原Ｂ遺跡が岡山県津山市瓜生原835番地他、草加部稲荷遺跡が、岡山県津山市草加部1560-1番地他で、両遺跡とも名称は中心地の小字名を取って遺跡名称とした。なお、草加部稲荷遺跡Ｃ地区については、当初前田遺跡として取り扱っていたが、調査の結果、稲荷遺跡と一連のものであったことが明確となったので、稲荷遺跡Ｃ地区と報告書作成段階で変更した。

2．発掘調査及び報告書作成に要した諸経費はすべて津山市費をあてた。

3．本書の編集は中山が担当し、第３章９、草加部稲荷遺跡Ａ地区の執筆を保田がおこなった他は、中山がおこなった。

4．遺構の実測は、瓜生原小原Ｂ遺跡、稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区を中山が、稲荷遺跡Ａ地区を保田が実施し杉山紀子、木村祐子の援助を受けた。

5．遺物整理、図版作成は、中山、保田を中心に、田中久美、野上恭子、木村祐子、林直美、角田由実の援助を受けた。

6．本書に使用したレベル高は、海抜絶対高である。使用方位は磁針方位で、真北より西偏約６度40分である。

7．出土遺物、図面類は、津山市沼弥生の里文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに
1　発掘調査にいたる経過……1
(1)瓜生原小原Ｂ遺跡……1
(2)草加部稲荷遺跡……1
(3)調査組織……2
2　位置と環境……3
(1)瓜生原小原Ｂ遺跡……3
(2)草加部稲荷遺跡……3
第２章　調査の概要
1　遺構の概要……5
(1)瓜生原小原Ｂ遺跡……5
(2)草加部稲荷遺跡……5
Ｃ－ａ地区……5
Ｃ－ｂ地区……10
Ｃ－ｃ地区……10
Ｂ－ａ地区……10
Ｂ－ｂ地区……10
Ｂ－ｃ地区……10
Ａ地区……10
第３章　遺構・遺物
1　瓜生原小原Ｂ遺跡……13
2　草加部稲荷遺跡Ｃ－ａ地区……16
3　草加部稲荷遺跡Ｃ－ｂ地区……19
4　草加部稲荷遺跡Ｃ－ｃ地区……19
5　草加部稲荷遺跡Ｂ－ａ地区……21
6　草加部稲荷遺跡Ｂ－ｂ地区……25
7　草加部稲荷遺跡Ｂ－ｃ地区……28
8　瓜生原小原Ｂ遺跡、草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区出土の遺物……31
(1)瓜生原小原Ｂ遺跡出土の土器……31
(2)草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区出土の土器……31
(3)瓜生原小原Ｂ遺跡、草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区出土の石器……38
9　草加部稲荷遺跡Ａ地区……41
第４章　要約……48

第1章　はじめに

1．発掘調査にいたる経過

（1）瓜生原小原B遺跡

昭和61年春、津山市産業部から津山市瓜生原地区の水田構造改善事業の実施計画について、津山市教育委員会文化課に埋蔵文化財の照会があった。計画は三ヵ年にわたっていたため、文化課では初年度施工地区の分布調査を実施するとともに、遺物散布地区の確認調査を昭和61年11月25日から同28日まで実施した。一部で平安時代のものとみられる柱穴等を発見したが、その部分は、造成計画を変更することで、ほぼ計画どおり初年度事業施工が行われた。

翌62年6月、二年度施工地区についての分布調査依頼が産業部から提出され、これをうけて、対象地の分布調査を実施。一ヶ所で弥生時代土器片を発見、確認調査の必要なことを産業部に連絡。工事着手予定日が迫っていたため、同年7月21日～31日に確認調査を実施。弥生時代竪穴住居跡3棟、古墳時代の浅い溝等を発見した。このため、昭和62年8月3日付津教文第52号で遺跡発見通知を文化庁長官に提出するとともに、産業部とその取扱に就いて協議。遺構遺存推定箇所のうち、道路予定部分および盛土とすることの困難な水田約300㎡について緊急に発掘調査を実施することとなり、62年8月15日付津教文第54号で発掘通知書を文化庁長官に提出した。

本調査は62年8月18日着手、同9月7日に完了した。

（2）草加部稲荷遺跡（一部旧称前田遺跡）

昭和62年6月産業部長溝口弘から、津山市草加部前田地区で水田構造改善事業実施計画に関する埋蔵文化財の照会が教育委員会文化課にあった。対象地は周知の遺跡であり、弥生時代集落遺跡東蔵坊遺跡隣接地でもあって、文化課職員の現地調査によっても集落遺跡の存在する可能性が強く感じられたので、昭和62年9月14日付津教文第71号で確認調査の必要な旨産業部に回答をおこなった。工事工程は既に切迫しており、工程が62年度、63年度の二工程に分かれているうち、とりあえず63年度工事対象部分約1,500㎡のみ確認調査を実施した。

確認調査は、昭和62年11月2日から11月30日まで実施、対象地内で二棟の弥生時代住居跡を発見

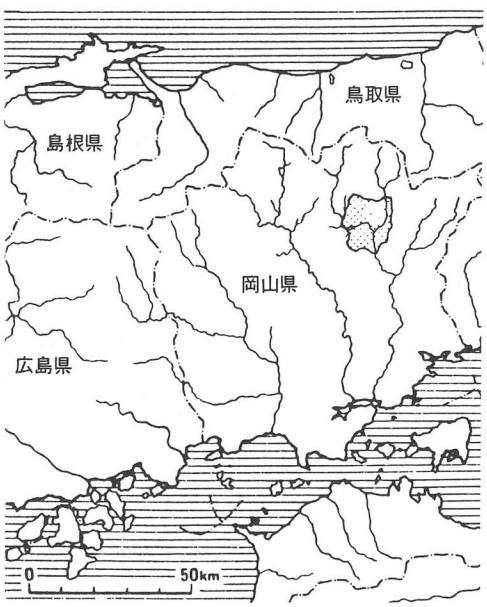


Fig. 1　津山市位置図

した。工事着手リミットは翌１月末で、調査期間が取れないため、おおむね南北二箇所に分かれる調査必要部分のうち、北部分（A地区）の工事を次年度送りとし、南部分（C地区）の調査を62年12月16日から実施した。調査終了は、63年１月19日である。なお調査時点ではこの部分を前田遺跡としていたが、のちに集落中心部分の小字名が稲荷であることが判明、一連の遺跡とみて間違いないので報告書作成段階でこれ等を稲荷遺跡に名称統一した。

第二工区の確認調査は、昭和63年４月14日から４月18日まで実施した。中世の柱穴、弥生時代住居跡等が全面に広がっていることが確認（B地区）され、この結果を基に産業部と協議、全面水田を休耕とし、前年繰越分（A地区）と合わせて約2,500㎡を７月から調査することとした。調査着手は昭和63年７月11日。調査終了は、昭和63年10月27日である。

（３）調査組織

調査主体者　津山市教育委員会　教育長　福島祐一

事務担当　津山市教育委員会　文化課　参事　内田康雄

係長　籾山三千穂

調査担当　中山俊紀

安川豊史

保田義治

調査作業員　瓜生原小原Ｂ遺跡

確認調査

赤坂虎夫　藤島律美　藤島雪子

本調査

河田端之　河田靖江　谷口正士

谷口武野　松永都

草加部稲荷遺跡

確認調査及び本調査

菅田正　長瀬繁夫　竹内敏夫

藤田加津子　藤田よしえ　竹内千里

竹内さかえ　今井司計子　今井治子

田上正範　今井譲　藤田要

今井久江　田上いつ子　今井静代

菅田八重子

遺物整理　中山俊紀　保田義治　赤松百合子

田中久美　野上恭子　木村祐子

林直美　角田由実

2．位置と環境

（1）瓜生原小原Ｂ遺跡

津山市東部、瓜生原小原地区に位置する。津山市東方、勝北町、勝央町から流れこむ広戸川左岸の小段丘上に存在する。遺跡存在位置は、標高90m程で、東南は柵原町・津山市境から北に延びる和気山等の最高所標高300mの山塊北端部が迫っている。

付近では弥生時代中後期の集落遺跡西吉田遺跡、中期の金井別所遺跡が調査されており、西方一帯は、津山市中核工業団地として近時50haが造成されていて、この工事の事前調査で10haが発掘調査され、多数の弥生時代遺跡が明らかにされた。

限定された地区で、これほど弥生時代の遺跡が多量に調査されたものは美作地区にはなく、美作地域の弥生遺跡間の諸関係を追求する上で、その資料を最も集中して蓄積した地域といえる。

（2）草加部稲荷遺跡

津山市北東部草加部字稲荷他に所在する。北方加茂町から流れこむ加茂川が綾部、草加部地区で狭小で急峻な谷を通り野村地区から高野平野に抜けるぬけぐちの右岸低丘陵上に存在する。標高は130～140m程である。北方は、烏仙等の中国山地に連なる。

付近の弥生時代遺跡としては、東蔵坊遺跡（A、Ｂ地区）、鮒込遺跡等が古くから調査されており、稲荷遺跡の調査と並行して上部遺跡が調査されている。

東蔵坊遺跡、上部遺跡とともに稲荷遺跡のいずれもが近接した同一丘陵上に存在していることから、これらは一連の集落ないしは同一集落と評価すべきものである。

参考文献
安川豊史「東蔵坊遺跡Ｂ地区」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第９集』津山市教育委員会1981
中山俊紀「オノ峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津山市教育委員会1985
河本　清「金井別所遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集』津山市教育委員会1988
行田裕美「深田河内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集』津山市教育委員会1988
保田義治「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市教育委員会1989
安川豊史「上部遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集』津山市教育委員会1990
行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会1990
保田義治「中原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第37集』津山市教育委員会1990

Fig. 2　周辺の主要遺跡分布図（縮尺１：50,000）

１．稲荷遺跡　２．小原B遺跡　３．鮒込遺跡　４．東蔵坊遺跡　５．上部遺跡　６．才ノ峪遺跡
７．ビシャコ谷遺跡　８．沼遺跡　９．沼E遺跡　10．野介代遺跡　11．押入西遺跡　12．狐塚遺跡
13．天神原遺跡　14．岡田遺跡　15．西吉田遺跡　16．一貫西遺跡　17．一貫東遺跡　18．深田河内遺跡
19．別所谷遺跡　20．金井別所遺跡　21．小原遺跡　22．大畑遺跡　23．崩レ塚遺跡　24．中原遺跡
25．紫保井遺跡

第２章　調査の概要

１．遺構の概要

（１）瓜生原小原Ｂ遺跡

発見遺構は、弥生時代竪穴式住居跡３棟（１、２、３号）、建物１棟、土壙墓３基、機能不明の古墳時代須恵器を含む浅いＵ字断面の溝等である。

このうち、完掘したものは１号住居跡、土壙墓３基のみである。

１号住居跡は、平面形態円形で直径９ｍ、２回の建直しとみられる痕跡がある。後期初頭の土器片が多量に発見されており、いずれの住居も後期のものとみられる。土壙墓１基は小口穴を持ち、他のものは小口をもたない形式のもので２基が並行に重複していた。いずれも１号住居跡によって切られ、中期後葉の土器破片が発見されているので、同期のものと考えてよいだろう。

建物跡は、完掘していないが、１間×２間の形態のものとみられ、１号住居跡に切られている。後期前葉の土器破片が含まれており１号住居より新しいものの、それほど所属時期に差のないものと考えられる。

２号住居跡は、確認調査時の試掘により発見されたもので、その一部を確認調査時に床面まで掘り下げた。推定規模、形態は平面形円形で直径６ｍである。床面から比較的大形の後期前葉の土器破片が発見されており、同期のものとみられる。一度の拡張痕跡がある。

３号住居跡も、確認調査の際発見され試掘溝の一部を拡張し調査したもので、一住居の約半分を調査した。平面形態は、方形で一辺５ｍ。火災痕跡があり、主柱の発見はなかった。弥生時代後期初頭の土器破片が発見されており、後期初頭の住居跡である可能性が強い。

遺跡全体としてみて、集落としては弥生中期後葉から後期前葉に営まれたものであろう。

（２）草加部稲荷遺跡

Ｃ－ａ地区

発見遺構は竪穴式住居跡２棟（１号、５号）、近世掘立柱建物１棟、この掘立柱建物に付属するとみられる溝１本等である。竪穴式住居跡はいずれも壁体溝、床面を一部残すのみで遺存状況は極めて悪かったうえ、遺構の錯綜がはなはだしく全容の把握は極めて困難であった。

１号住居は平面形態円形で、直径10ｍのものがやや中心をずらして２棟重複していた。壁体溝埋土から後期前葉の土器片が発見されており、主柱とみられる柱穴からも同期の土器破片が発見されているので、いずれも後期前葉のものであろう。

５号住居跡も平面円形で推定直径８ｍ、火災痕跡を床面に残していた。出土土器から中期後葉のものと判断される。

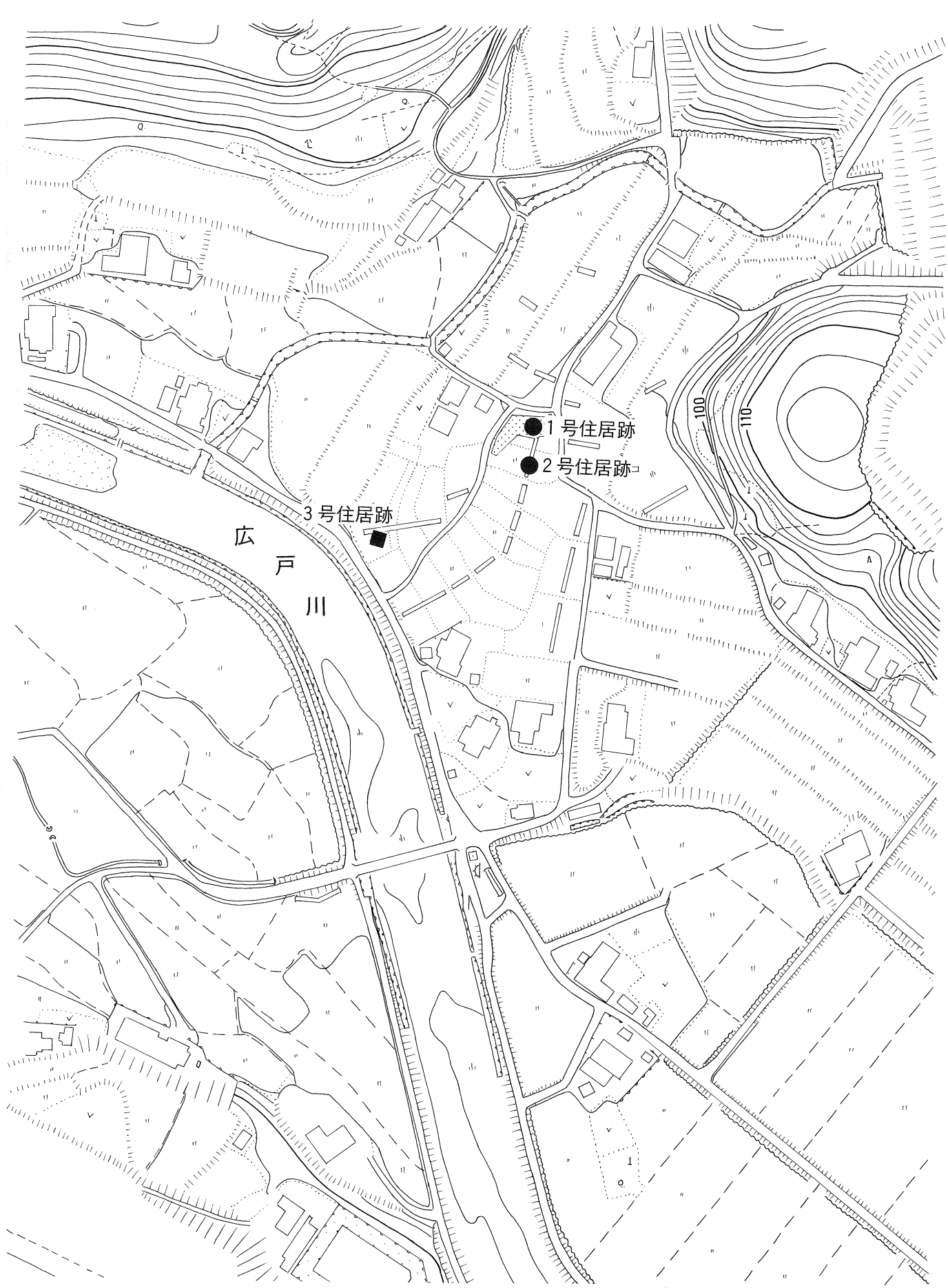


Fig. 3　小原Ｂ遺跡周辺地形および試掘溝配置図（縮尺１：2,500）

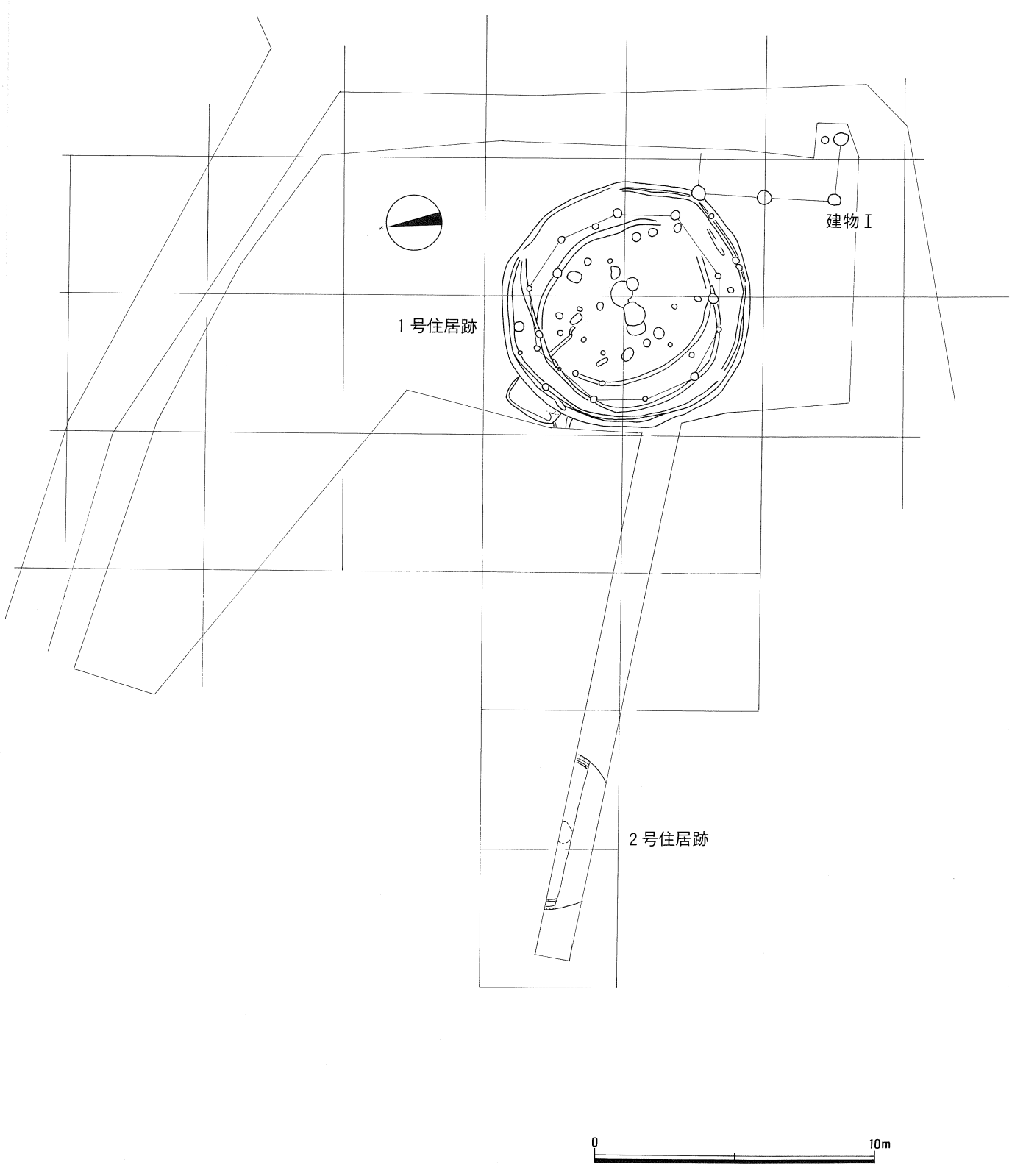


Fig. 4　小原Ｂ遺跡調査区全体図（縮尺１：200）

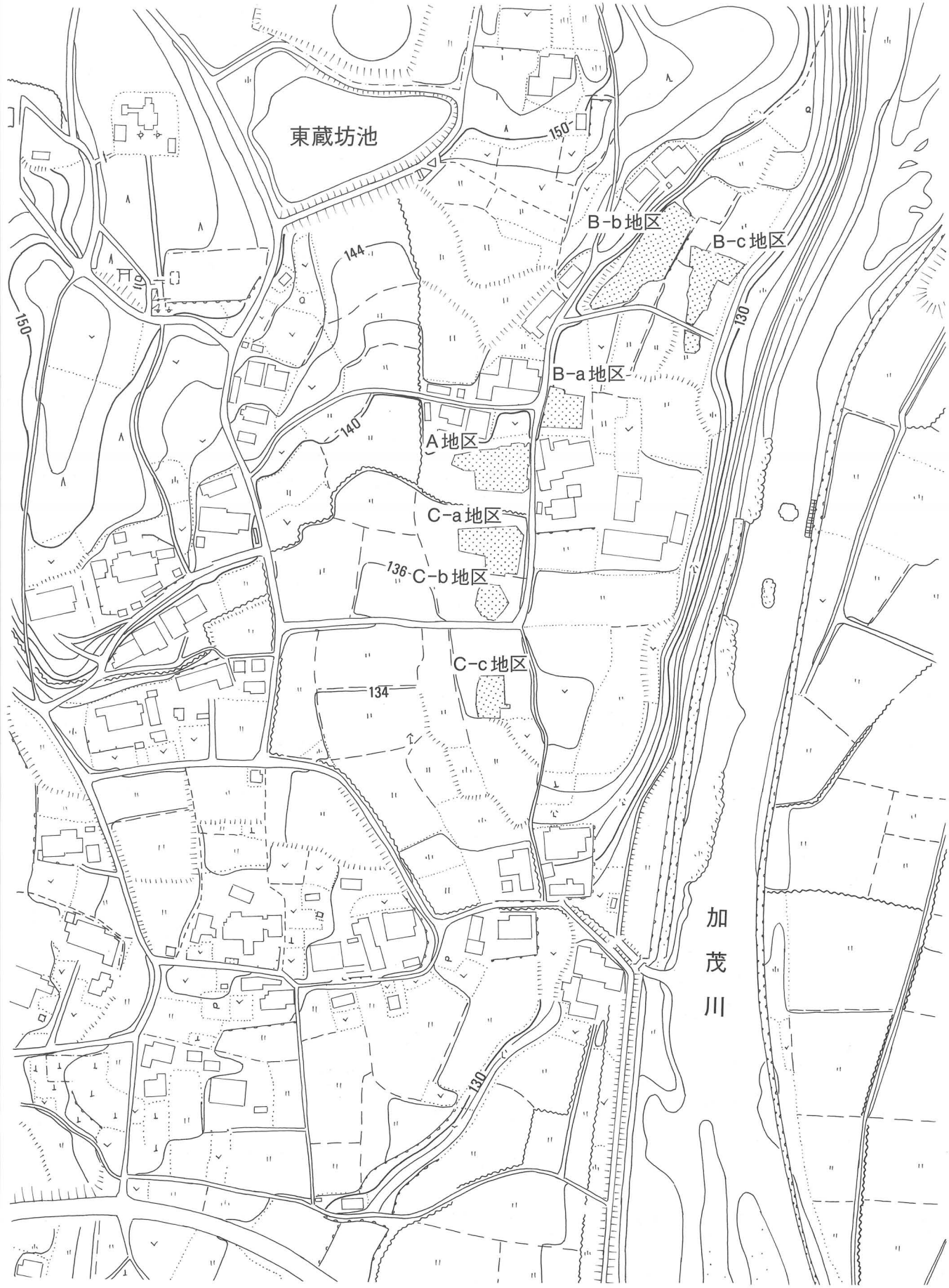


Fig. 5　稲荷遺跡周辺地形および調査区配置図（縮尺１：2,500）

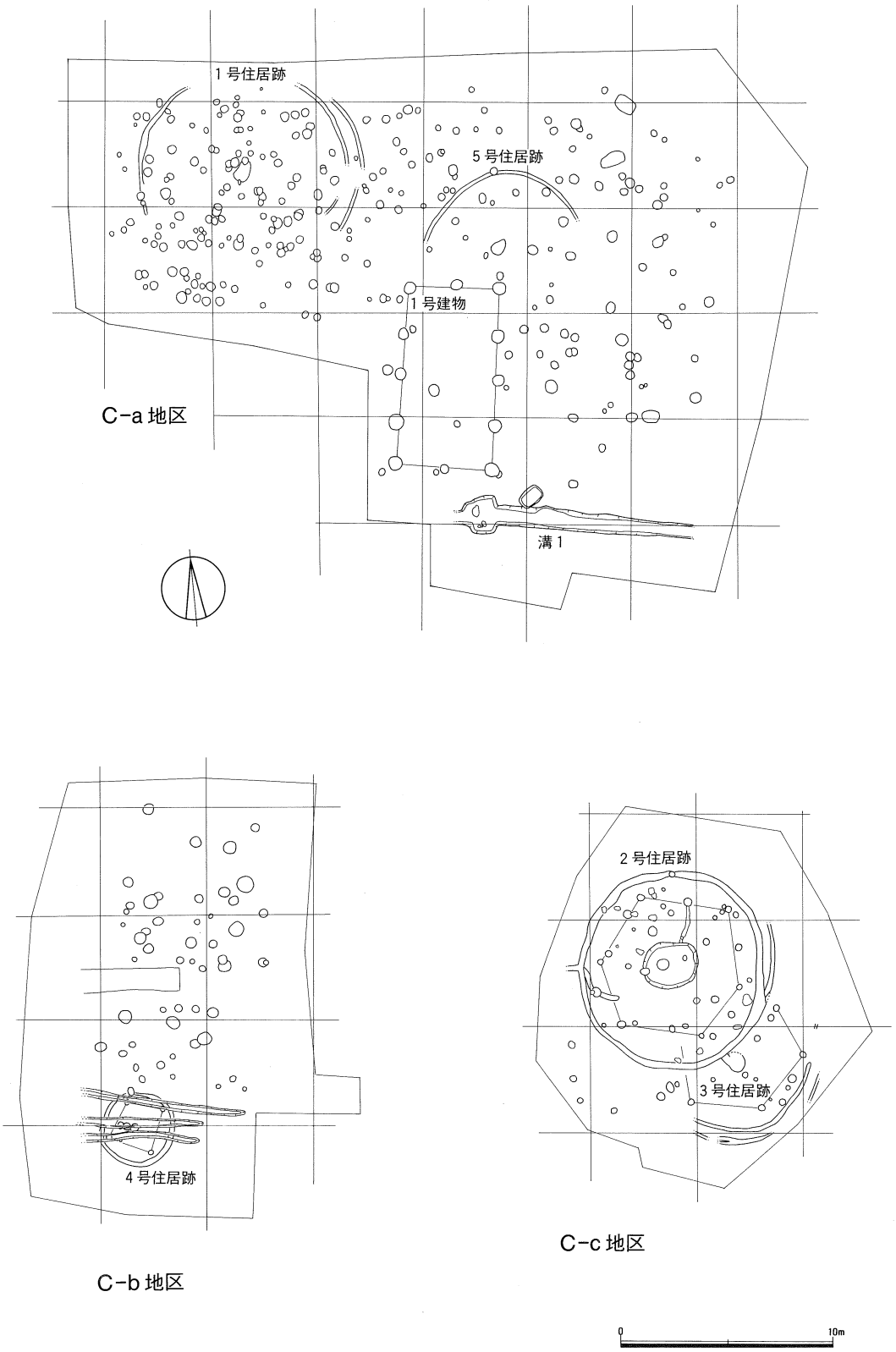


Fig. 6　稲荷遺跡C－a、C－b、C－c地区遺構全体図（縮尺1：300）

近世掘立柱建物は、２間×４間で主軸をほぼ南北にとっている。南辺に並行に溝が走っており、南東隅の部分で溝は方形に拡張され、大形の石材がこの部分に使用されていた。

Ｃ－ｂ地区

発見遺構は、竪穴式住居跡２棟（２、３号）。２号住居跡は、平面形態円形で直径９ｍである。出土遺物から後期前葉のものと判断される。３号住居跡は、２号住居に切られており、２号住居に先行する。１度の拡張痕跡をもつ。

Ｃ－ｃ地区

発見遺構は、竪穴式住居跡１棟（４号）、近世円形墓等である。４号住居跡は平面形態隅丸方形で、直径3.5ｍ。小形住居に属す。出土遺物から中期後葉のもと判断される。上面を現代の暗渠３本に切られ攪乱を受けている。近世ないしは現代墓は、平面円形で桶形の棺におさめられたものであろう。なお、隣接地は江戸時代にさかのぼる墓地である。

Ｂ－ａ地区

調査区は丘陵鞍部に位置しほぼ平坦である。発見遺構は、弥生時代竪穴住居跡１棟（10号住居跡）、中世建物跡１棟、井戸１基、素掘の溝、調査区南西の大溝等である。調査区南西の大溝は近世以降のものとみられる。中世の遺構は出土土器からみて一連のものとみられ、井戸と溝出土の土器には、同一個体のものが多い。

Ｂ－ｂ地区

調査区は、東向きの丘陵斜面に位置する。調査区西半は、水田造成により大きく削平されているらしく、遺構の残存は少なかった。発見遺構は弥生時代竪穴住居跡３棟、長方形竪穴住居状遺構１棟、その他弥生時代の段状遺構と称される溝、柱穴列多数が発見された。

Ｂ－ｃ地区

ｂ地区下段の斜面に位置し、ｂ地区と同様水田造成により北西部が大幅に削平されていた。発見遺構は、弥生時代の竪穴式住居跡４棟、同段状遺構３、古墳時代の鍛冶炉下部とみられる土壙、近世の石組ないしは石蓋暗渠等が発見された。竪穴式住居跡には、中期中葉にさかのぼるものが含まれ、これは草加部地区で既発見の住居跡のうち最古のもので、この点注意される。

Ａ地区

調査区は南東方向にのびる丘陵の東斜面に位置し、標高は約138ｍを測る。調査区の東側に遺構が集中しており、北西部は遺構面削平のために、また南西部は深い谷が入り込んでいるために遺構の遺存状況が悪くなっている。遺構には弥生時代後期の竪穴式住居址４軒、古墳時代の竪穴式住居址１軒のほか、土壙７基、中世の土器片等を埋土中に含む多数のピットが検出されている。その柱穴群による明確な建物址は検出できなかった。また、４号住居址の埋土内から古式の耳付椀形須恵器が出土しており、周辺部に遺存している古墳群との関係から注目されるものである。

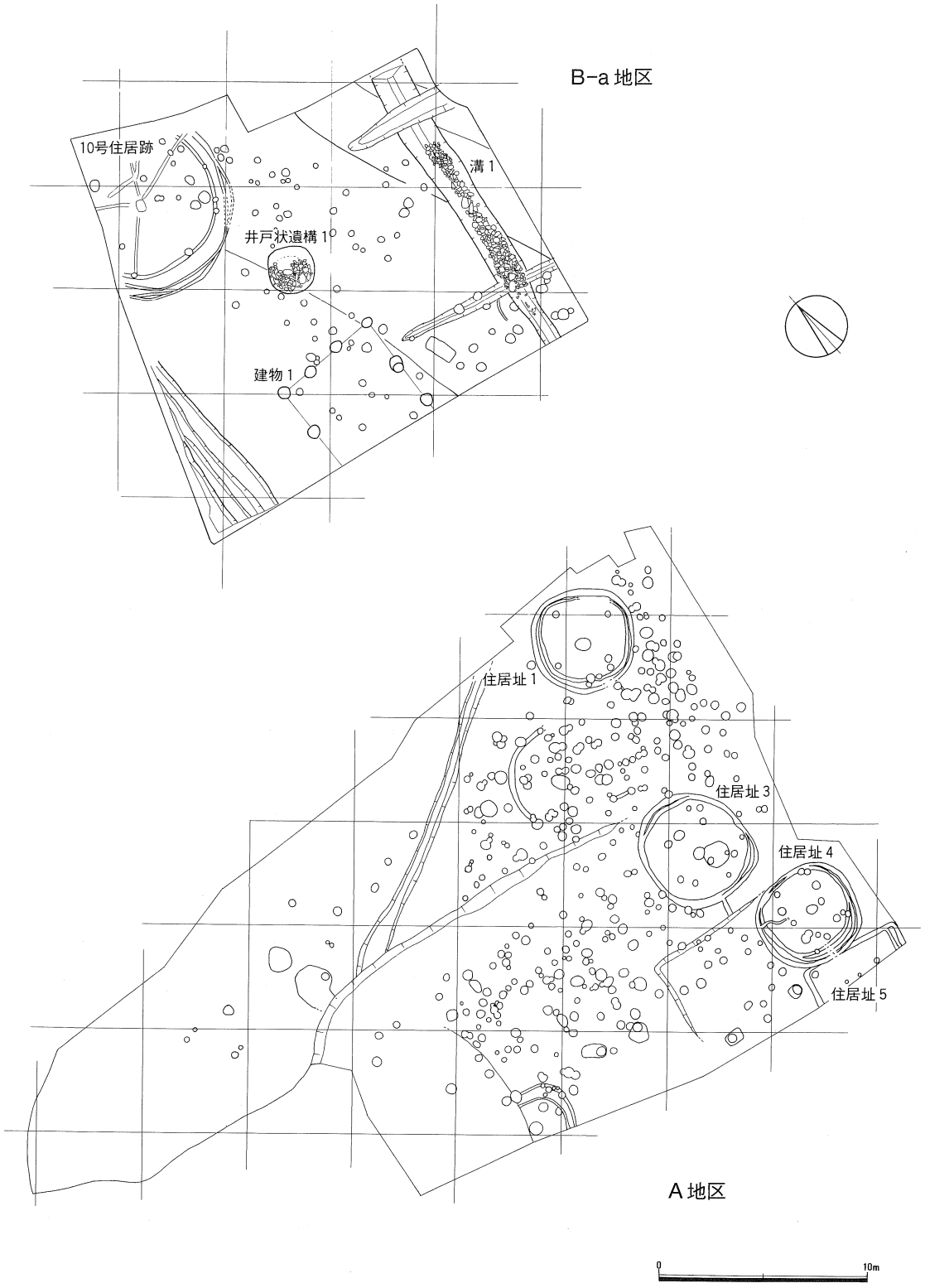


Fig. 7　稲荷遺跡A、B－a 地区遺構全体図（縮尺 1 ：300）

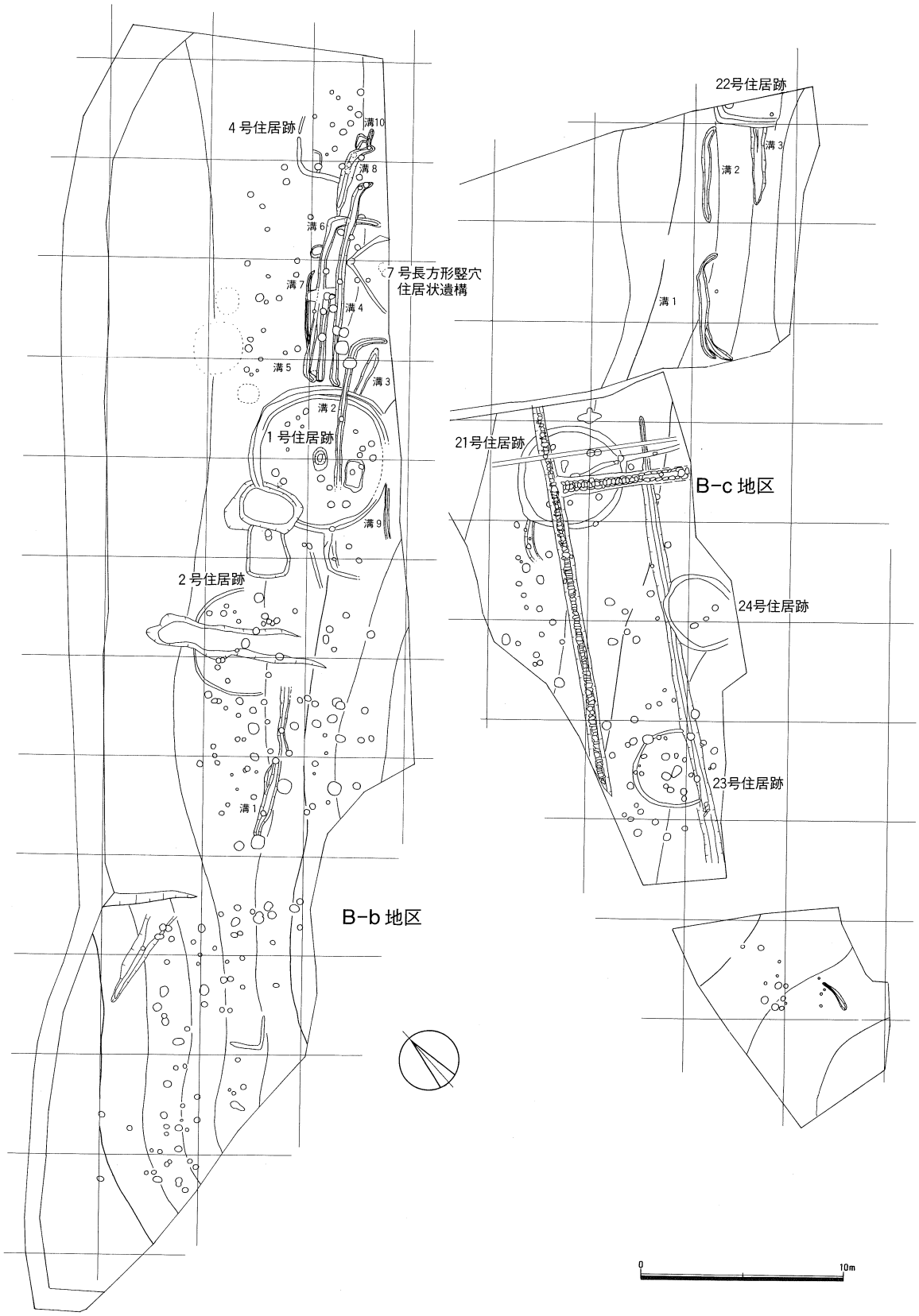


Fig. 8　稲荷遺跡Ｂ－ｂ、Ｂ－ｃ地区遺構全体図（縮尺１：300）

第３章　遺構　遺物

１．瓜生原小原Ｂ遺跡

瓜生原小原Ｂ遺跡では、弥生時代後期前葉の竪穴式住居跡３棟、建物跡１棟、中期後葉とみられる墓址及び古墳時代後期の須恵器片を含む浅い溝状の遺構が発見された。このうち、本調査によって調査されたのは、構造改善事業により削平が予定されていた部分で発見された１号住居跡と建物、墓址のみである。従って、古墳時代後期の溝については性格が不明のままであるのでここでは記述を省略する。

１号住居跡

直径９ｍの平面形円形の竪穴住居跡である。複雑な重複があり最低３度の建て直しがあり、拡張痕跡も部分的にみられる。住居の柱群は３群あり、10本で構成されるもの１（柱群Ⅰ）、６本で構成されるもの２（柱群Ⅱ、Ⅲ）がある。それぞれに対応する壁体溝がいずれも全周しないまでも存在し、またそれぞれに対応して中央穴３穴が発見された。

中央穴、壁体溝、柱にそれぞれ切り合の関係が残されており、それぞれの新旧の関係は柱群Ⅲ→柱群Ⅱ→柱群Ⅰの順序で建築されている。また、竪穴住居跡床面に土壙墓の小口穴のみ残され（土壙墓Ⅰ）、住居肩部分で小口穴をもたない土壙墓（土壙墓Ⅱ）が存在した。竪穴住居跡と墓、建物との間の切り合いからいうと、それぞれ墓→柱群Ⅲ→柱群Ⅱ→柱群Ⅰ→建物の関係が把握された。

最終住居床面に弥生後期前葉の土器が残されており、竪穴住居廃絶時期は弥生後期前葉と考えられる。埋土中には弥生中期後葉から後期前葉までの土器が含まれ、墓は弥生中期後葉のものである可能性が強い。建物柱穴の中から弥生後期前葉の土器細片が発見されているがこれは必ずしも建物の時期を示す手掛かりとはならない。明確にはしがたいが、後期前葉以降の土器は付近で発見されておらず、ほぼ同時期の建物であろう。

中央穴は、最終住居に伴うものは自然埋没した情況を示していたが、他の中央穴はそれぞれその都度人為的に埋められたようで、上層に黄色土、下層に炭を含む黒色土が堆積し、立て替えは連続したものであった可能性が考えられた。

建物跡は、現生活道にかかっていたため調査が及ばなかったが１間×２間の弥生時代の高床倉庫とされる建物と一般的に共通の要素を持つものである。各柱間の距離はＰ１～Ｐ２が2.4m、Ｐ２～Ｐ３が2.5m、Ｐ３～Ｐ４が2.2mある。

土壙墓Ⅰは、住居床面に両小口穴のみを残すだけで、これ以外の手掛かりを残していない。土壙墓Ⅱは、小口穴のない土壙墓とみられる穴で並行に２基の墓がならんでいたらしいが、掘り分けることが出来なかった。埋土中に中期後葉とみられる土器細片をふくむ。

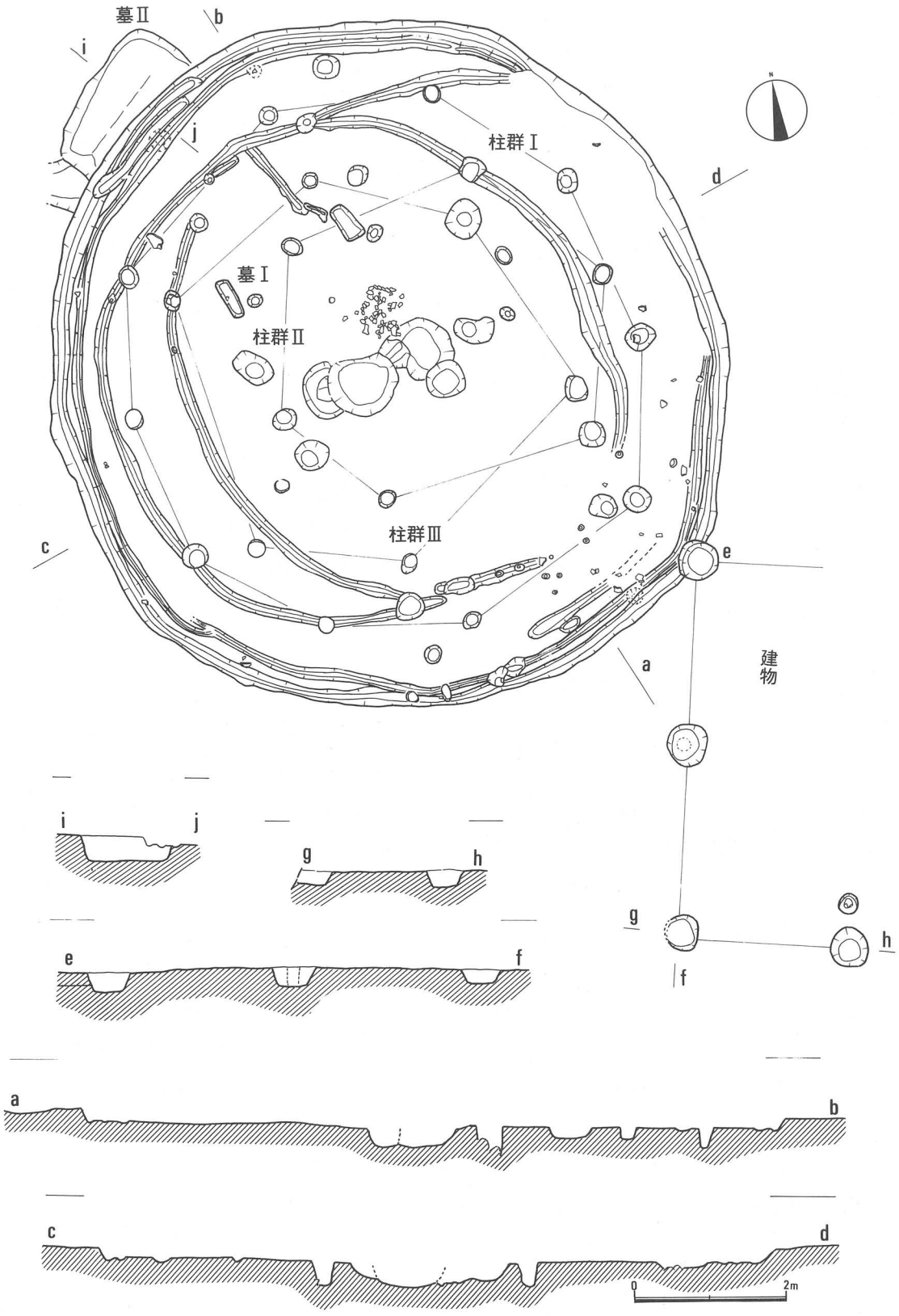


Fig. 9　瓜生原小原Ｂ遺跡、１号住居跡、建物１、墓跡平・断面図（縮尺１：80, ＬＨ93m）

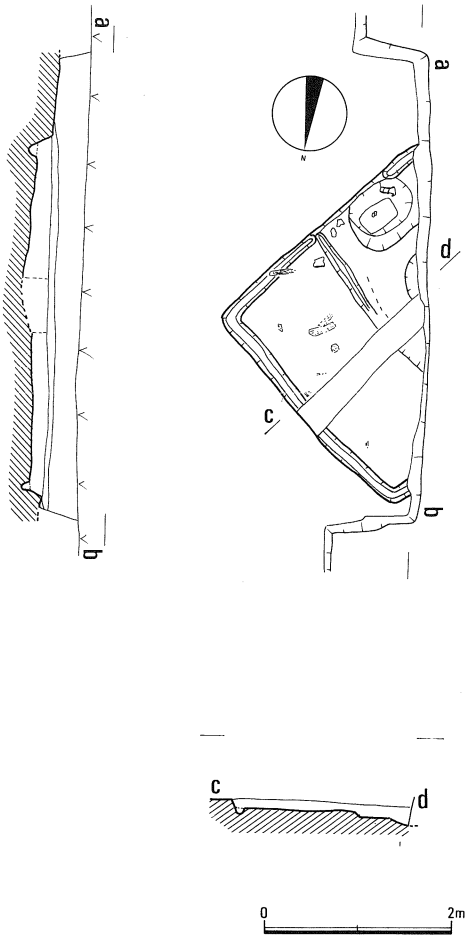


Fig.10　瓜生原小原Ｂ遺跡、３号住居跡平・断面図（縮尺１：80，ＬＨ90.5m）

２号住居跡

1.5ｍ幅の試掘溝調査の際発見された住居跡で、推定直径６ｍ前後の円形竪穴式住居である。

このうち、住居跡内を掘り下げたのは、北側の試掘溝側面に沿って幅40㎝のみである。

このサブトレンチ西端床面では、二重に壁体溝の痕跡が残っており、東端にはそれが確認できなかったので、おそらくこれは住居拡張の跡を示すものであろう。

住居床面で、比較的大形の弥生後期前葉の土器片が発見された。

発見位置は、構造改善事業で削られない部分であったので、本住居はこれ以上発掘調査されなかった。

３号住居跡

確認調査の試掘溝で発見された住居跡で、住居跡のごく一部らしい落ち込みが発見されたために、試掘溝を拡張して住居跡であることを確かめた。

この結果、方形ないしは長方形の住居跡の２分の１ほどを調査した。壁高は良く残ったところで約30㎝程を残すのみである。

火災にあっており、床面に炭化材を多く残していた。周壁部壁体溝上にも炭化材が遺存していて、その遺存のさまは、壁体溝が使用時埋っていたことが考えられた。西北部は床面に若干の傾斜があり、また安定した情況を呈していなかった。これに対応して住居中ほどに壁体溝状の溝が残されていた。南東部の辺に接して直径50㎝ほどの浅い穴が掘られていて埋土の中には土器破片少数が含まれていた。

出土土器には、弥生時代中期後葉から後期初頭のものまで含まれるが、後期初頭のものが主体となっており、中期後葉のものは混入と考えられる。

2．稲荷遺跡Ｃ－ａ地区

Ｃ地区北端の調査区で、主な発見遺構は弥生時代竪穴式住居跡２棟（１号、５号）、近世の掘立柱建物１棟（１号）、これに付属する溝である。竪穴住居跡はいずれも床面を残すのみで、それぞれの概況が摑みにくいのみではなく、多数の柱穴と錯綜しており住居のものとの区別がつきがたかった。

１号住居跡　直径10m前後の円形住居で２棟分の壁体溝痕跡がある。この内１棟分の住居主柱群については、位置、形状、深さ、いずれもが石材を用いているという特徴から実測図で線引きした６本が考えられるが、他の１群については明確にしがたかった。床面及び壁体溝出土の土器片は、いずれも弥生時代後期前葉のものであり、同期の住居であろうとみられる。

５号住居跡　直径８ｍ程の円形住居跡で火災にあっていた。床面も北半分を残すのみで遺存は良くなかった。主柱穴は実測図で示した４本とみられ、内１本は１号建物と重複している。火災による炭化材が床面に残っているほか、焼土面及び焼土ブロックが長い帯状に残されていた。中央穴は不整形の浅いもので、床面からの深さは15㎝程度である。埋土のなかには底まで炭化物が含まれていた。

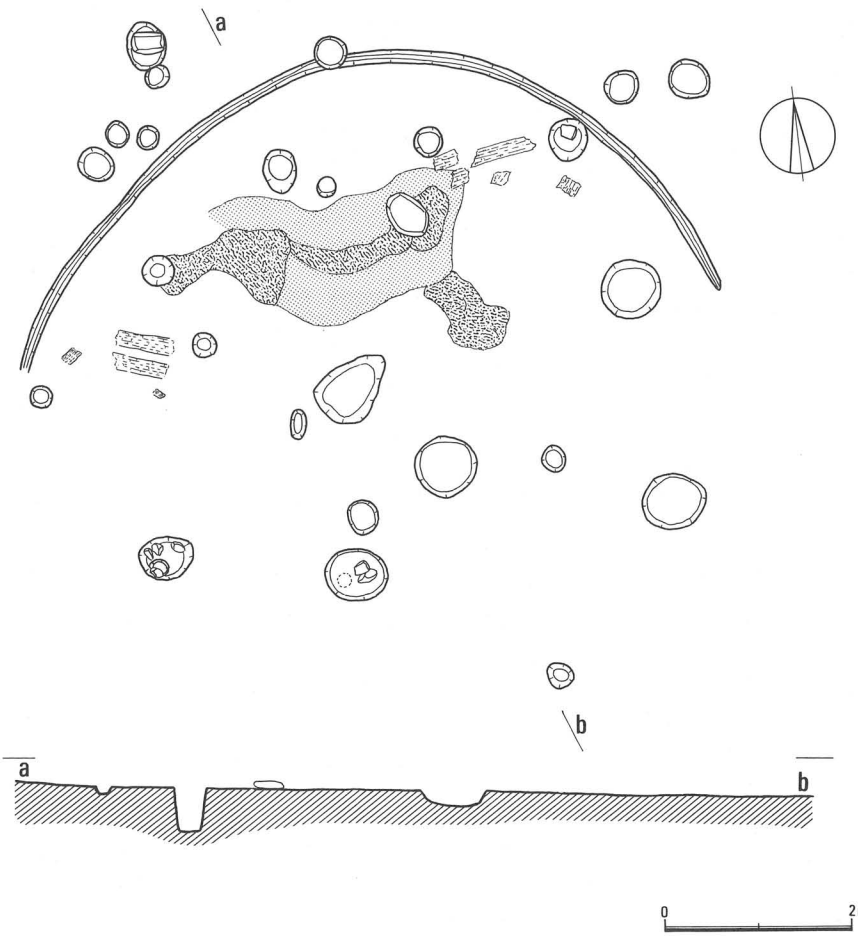


Fig.11　Ｃ－ａ地区５号住居跡平・断面図（縮尺１：80，ＬＨ137m）

北部分床面に作業台とみられる平らな河原石が残されていた。

１号建物　中世の掘立柱建物とみられ桁行8.6ｍ梁行4.6ｍの規模である。

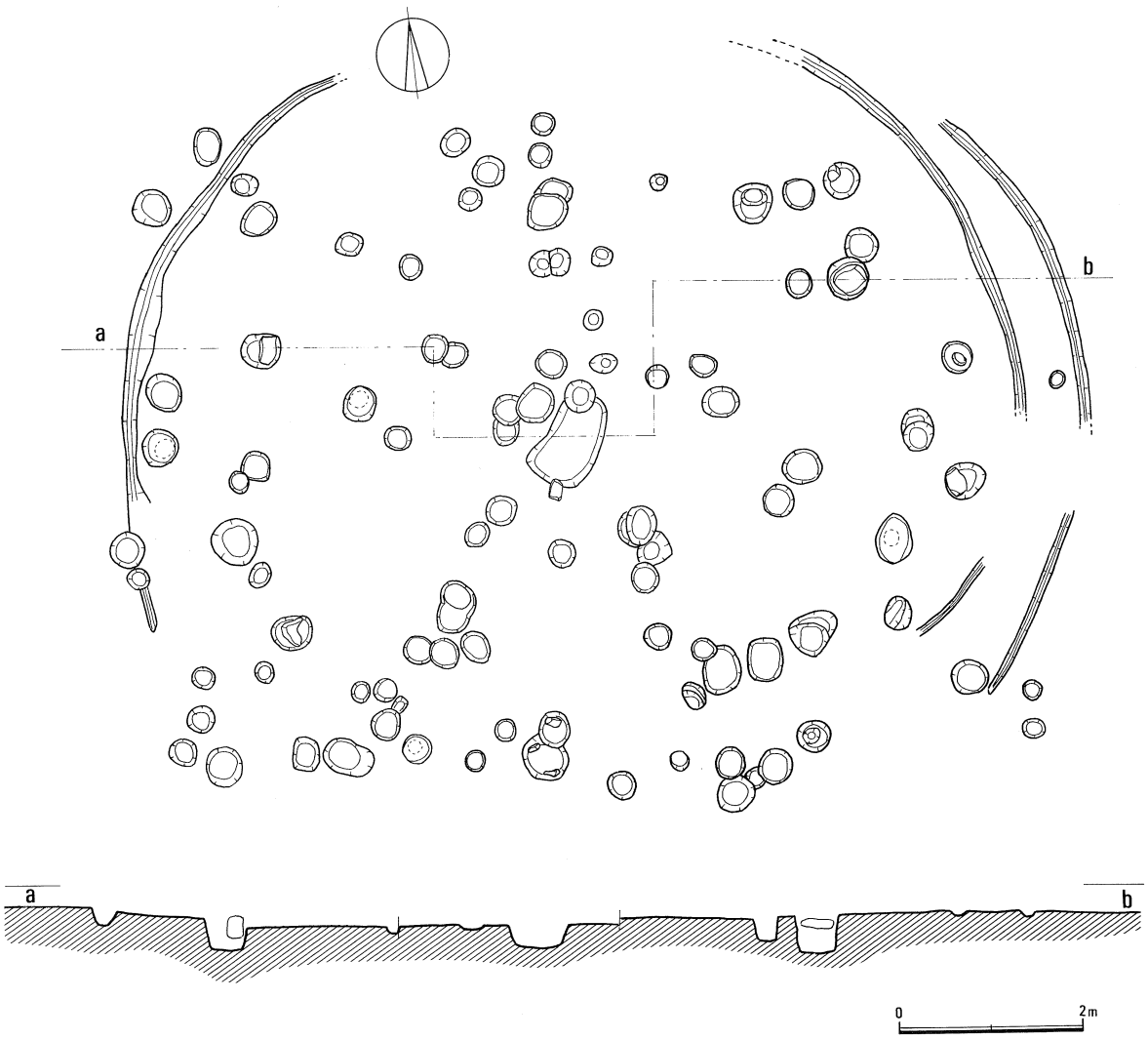


Fig.12　C－a地区1号建物および溝1平・断面図（縮尺1：80，LH137m）

各柱間距離はP1～P2、2.2m、P2～P3、2m、P3～P4、2.3m、P5～P6、2.3m、P6～P7、2.3m、P7～P8、2.1m、P8～P9、2.2m、P9～P10、2.1m、P10～P11、2.2m、P11～P12、2m、P12～P1、2.2mである。P3、9、10、11で柱痕跡が確認されているが、いずれも直径18cm前後の値を示している。

建物南辺にそって幅1m程の溝が東西に走り、建物南東角部分で方形状に幅を広げており、この部分に大形の石材が堰を形成していたように残されていた。

建物1の柱穴中には、いずれからも弥生土器細片が発見されているが、これ以外の遺物の発見はなく、時期推定の手掛かりを欠く。溝中から備前焼とみられる小皿が発見され、両者を一連のもとみていいから、いずれも近世遺構としての位置付は可能であろう。

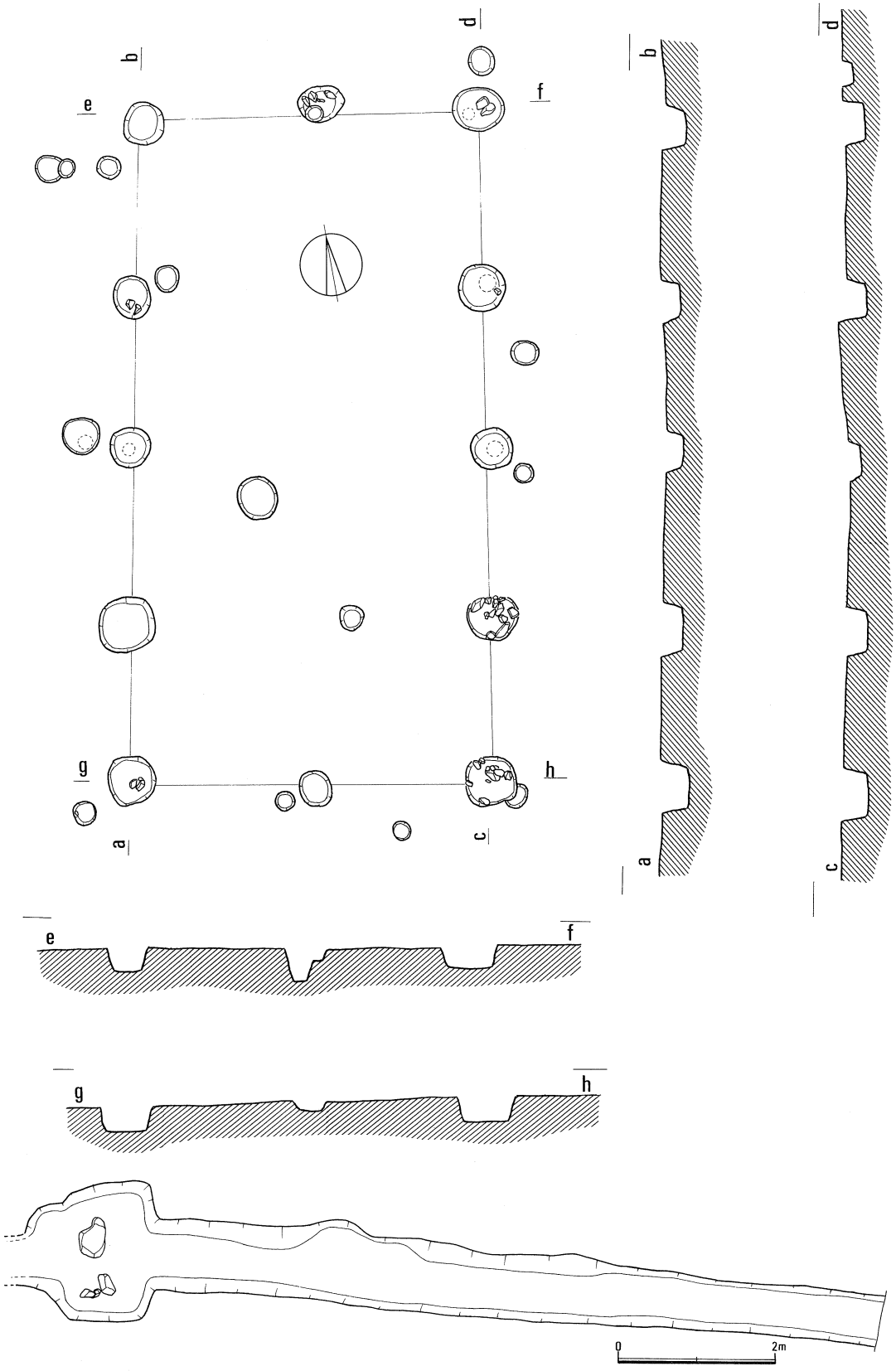


Fig.13　C－a地区1号建物および溝1平・断面図（縮尺1：80，LH137m）

3．稲荷遺跡Ｃ－ｂ地区

Ｃ－ｂ地区で発見された遺構は、弥生時代の竪穴式住居２号、３号と、部分的に壁体溝の発見された１棟の、３棟があり３号は１度の拡張痕跡をもっている。

２号住居跡　直径９ｍの大形の住居跡で、遺存情況も良かった。６本の主柱で構成されており、南北の梁間は４ｍ、3.7ｍあって他より相当広い。中央穴の周囲は広い範囲で一段低くなっており、この部分の埋土には、焼土細粒、炭粒が多く含まれていた。中央穴は床面からの深さ約50㎝で、底部には灰混じりの粘質土が10㎝ほどの厚さで堆積し、その上部は焼土ブロックを含む褐色土が厚く堆積していた。この褐色土層中には炭化粒がほとんど含まれていなかった。

床面よりやや浮いて、作業台とみられる平たい河原石が多数遺存していた。出土遺物はいずれも住居廃絶後の流入とみられるもので、土器片多数及び石庖丁片が発見された。土器片はいずれも細片がおおかった。出土土器の所属する時期幅は、弥生時代中期後葉から後期前葉に限られており中央穴の形状などからみて後期前葉の住居とみられる。

３号住居跡　床面を残すのみのものであるが、壁体痕跡が２条確認された。主柱は６本で構成されていたとみられるが、２号住居と切り合う部分に存在したはずの２本については、調査時確認できなかった。中央穴はおおづかみにみて２段掘りのような形状を呈し、床面からの深さは、約50㎝ある。２号住居跡によって切られており、先行することは確かであるが、明確に時期を決定するものはない。中期後葉に遡る可能性もあるが、後期初頭のものであろう。

4．稲荷遺跡Ｃ－ｃ地区

Ｃ地区で発見された遺構は竪穴式住居１棟（４号住居）および近世の円形墓穴のみである。

４号住居跡　隅円方形を呈する一辺3.5ｍの住居で小形住居に属する。上部を暗渠排水溝によって削られているが、おおむね全体像が把握された。主柱は４本で構成され、中央穴は浅く床面から約25㎝程の深度を示す。埋土中に厚手の大形土器片が含まれていた。これと切りあう柱穴２穴があるが、これ等はいずれも、中央穴に先行する。床面は黄色粘質土を用いた貼床を施しており、この黄色粘質土は壁体溝部分をほぼ覆っており、住居使用時は壁体の大部分が埋っていたことが明らかであった。出土土器は少量で、１次的な遺存状態で出土していないが、これによると中期後葉の住居とみられる。

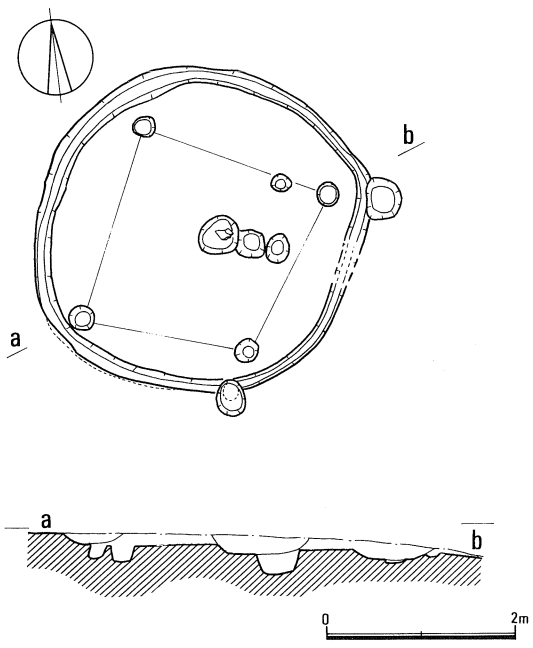


Fig.14　Ｃ－ｃ地区４号住居跡平・断面図
（縮尺１：80，ＬＨ137m）

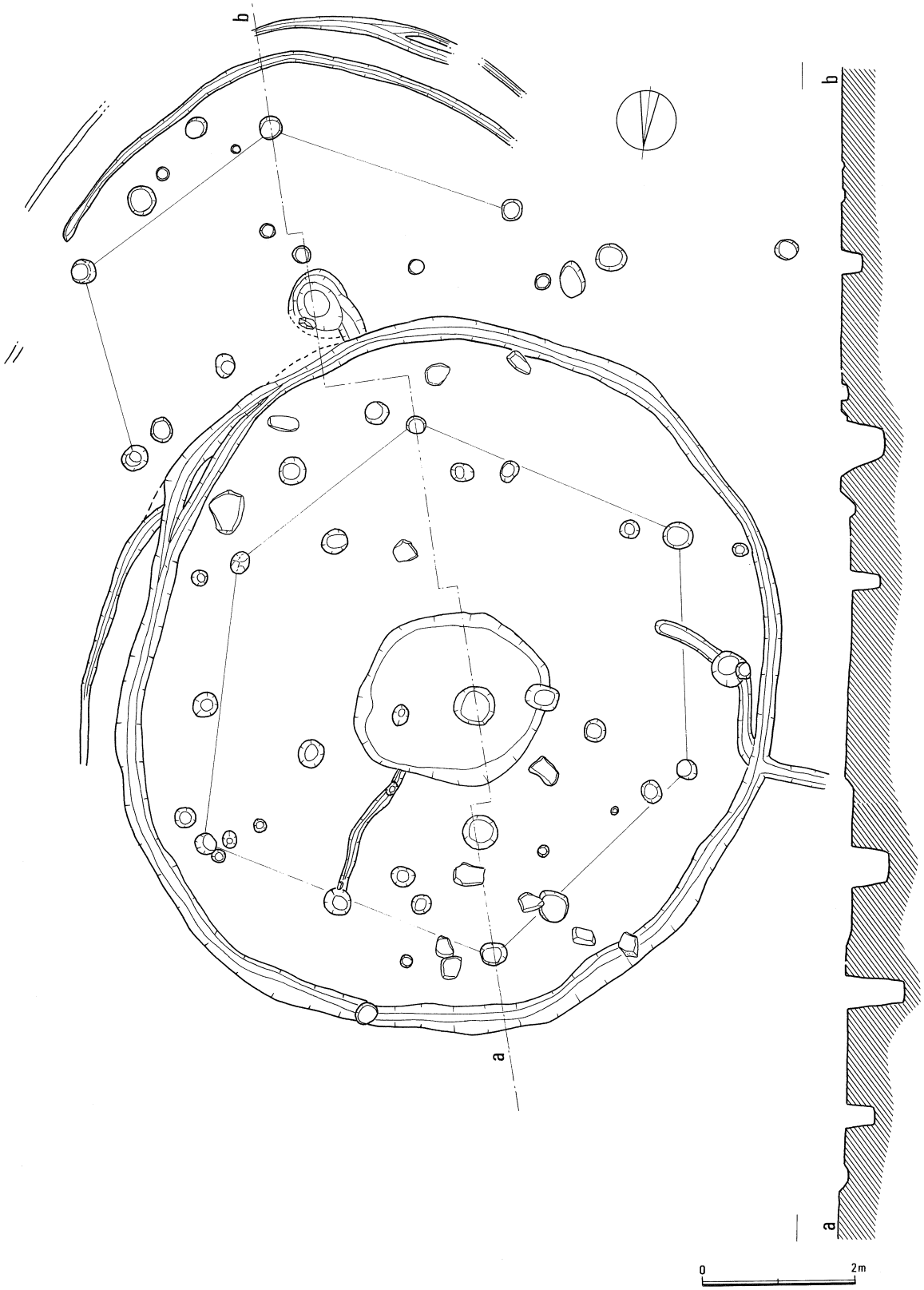


Fig.15　C－b地区2号3号住居跡平・断面図（縮尺1：80，ＬＨ137m）

5．稲荷遺跡Ｂ－ａ地区

稲荷遺跡Ｂ－ａ地区では、発見された主な遺構として弥生時代竪穴式住居１棟（１号住居)、中世建物跡１棟（１号建物)、井戸状遺構（井戸１)、溝（溝１）がある。

10号住居跡

ａ調査区北西端で発見された直径８ｍ強の住居跡で、床面だけを遺存させ、調査区外にかかり全体の約半分強を調査したのみである。火災にあっており、床面壁体溝中に焼土粒、炭化物が多く含まれていた。壁体溝痕跡は、３本（１、２、３）あり３棟分の重複が考えられるが、中央穴は同一箇所に重複して２穴あって、推定主柱群２群以上は考えられず、外側の２本についてはほぼ同一住居の拡張ないしは縮小の痕跡であろう。最終中央穴に伴う壁体溝は、焼土、炭化物の情況から３が考えられ、この住居に伴なう主柱は、４本が対応する位置に発見され全体は８本程度であったことが考えられる。中央穴には焼土大ブロックが陥入しており、この周囲は炭化物、灰を含む黒色土で覆われていた。中央穴焼土下に弥生後期前葉の土器破片が埋もれており本住居廃絶の時期は他の出土土器からみても後期前葉と考えられる。中央穴に続く小溝上面で鉇が発見された。本住居廃絶時の遺存品とみてよい。

中世建物１

おおむね南北方向に主軸をとる長方形の掘立柱建物で、北部分が発見された。北辺梁行2.7ｍ、４本柱で構成され、東側桁部は３本、西側桁部は２本分のみ発見された。柱埋土中には弥生土器細片のみしか発見されておらず、時期決定のさしたる根拠はない。中世建物としたのは、北に接する井戸状遺構、東側を走る溝と一連のものとみたからである。

井戸状遺構１

口部直径2.4ｍ、検出面よりの深さ1.2ｍの浅い素掘の井戸とみられる遺構である。断面観察によっても井筒様の痕跡は確認されなかった。上層には人頭大から挙大の石材が多数埋めこまれていて、この石材に狭まれ備前焼とみられる陶器破片が多く発見された。これ等の破片は、東側で発見された溝埋土中の石材間で多く発見された中世土器と接合するものが多く、両者は一時に埋立てられたことが分かる。

溝１

調査区東端に南北方向15ｍにわたって発見された溝で、北部分が深く南から北に流れた溝である。溝幅最小0.8ｍ、最大2.0ｍを測る。南部分の底はＵ字形の断面を呈し、北部分はＶ字形を呈する。井戸と同様上層部に多数の石材を含み、人為的に埋められたことがわかる。これ等の石材間に中世陶器破片多数が発見され、また石臼破片が発見された。調査地の地形などから考えて、この溝はこの部分に中世の屋敷地が存在し、その東端を画する防御的意味あいを持った溝であったことが考えられる。ちなみに、溝南部分の柱跡、壁体溝状の溝は弥生時代のもので、この部分にも住居の存在した可能性は高いが、詳細は不明。

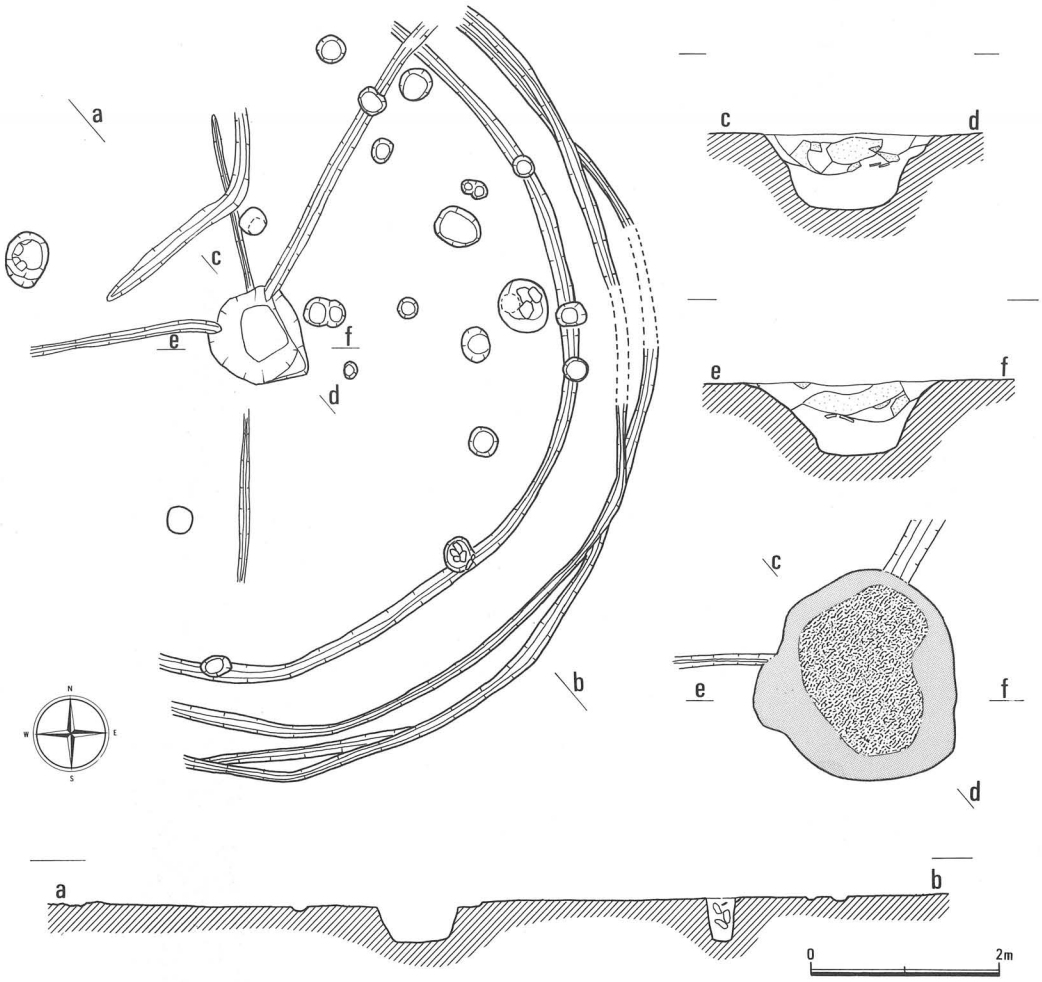


Fig.16　B－a 地区10号住居跡平・断面図（縮尺１：80 中央穴平・断面図は１：40，ＬＨ139.50m）

井戸１、溝１出土中世遺物

井戸１及び溝１からは、備前焼とみられる赤褐色ないしは灰色の中世陶器破片（Fig21－１～９）が、比較的多く発見されている。いづれも一括投棄されたとみられ、出土土器には所属年代の差は認められない。このほか、砂岩製の石臼とみられる破片（Fig21－10）が４点発見されている。

発見された中世陶器の器種は壺（Fig21－４、６、７）甕（Fig21－１～３、５、９）及び摺鉢（Fig21－８）である。

これらの陶器の特徴は、不老山古備前窯跡群出土のもの[①]に類以し、その推定年代は15世紀後半から16世紀前半にあたるとされている[②]。

① 河本　清「不老山古備前窯跡」埋蔵文化財発掘調査報告　岡山県教育委員会　1972
葛原克人
② 岡山県教育委員会　伊藤晃氏の御教示による。

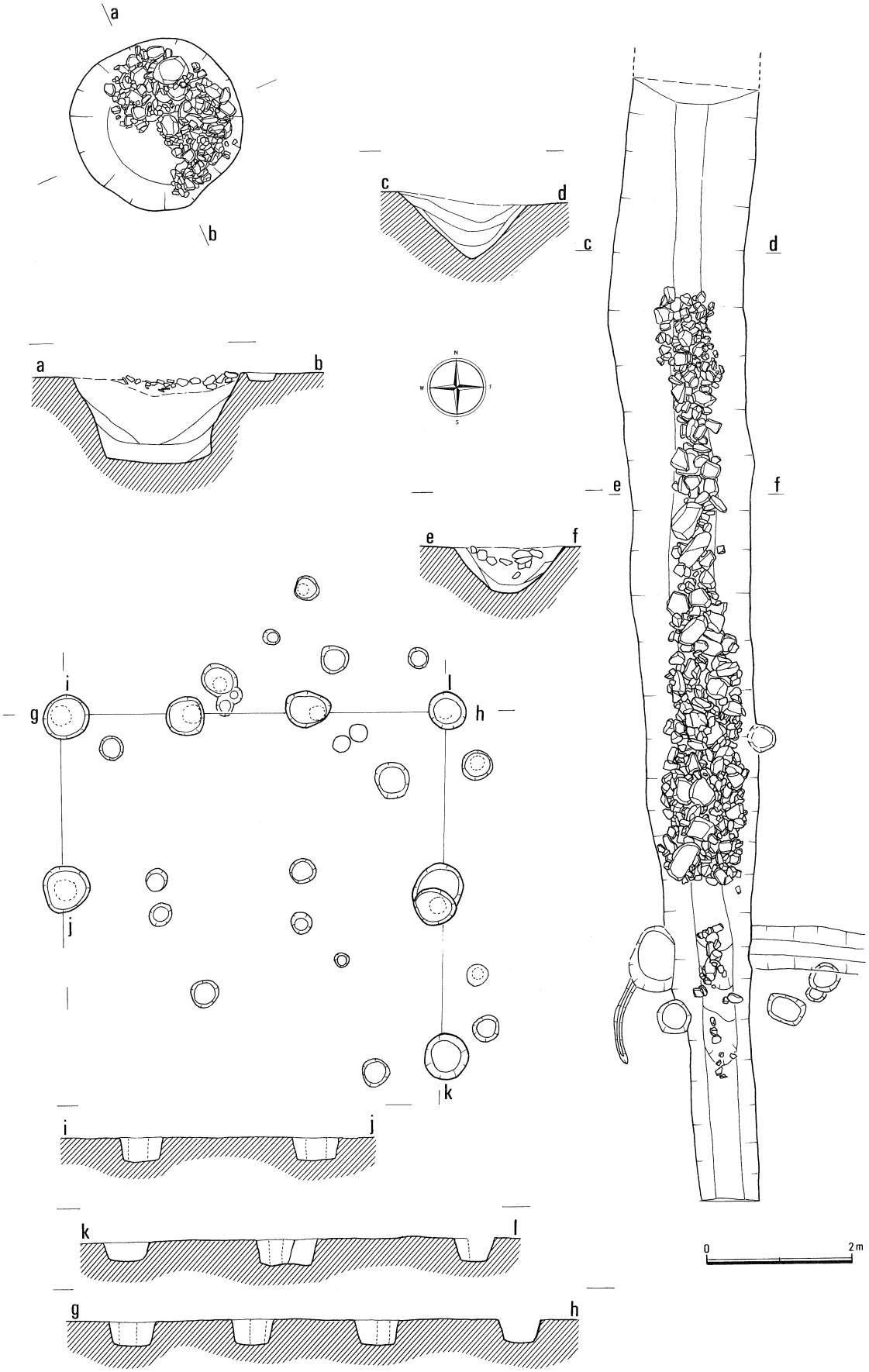


Fig.17　B－a 地区井戸Ⅰ、溝Ⅰ、建物Ⅰ平・断面図（縮尺１：80，ＬＨ139.50m）

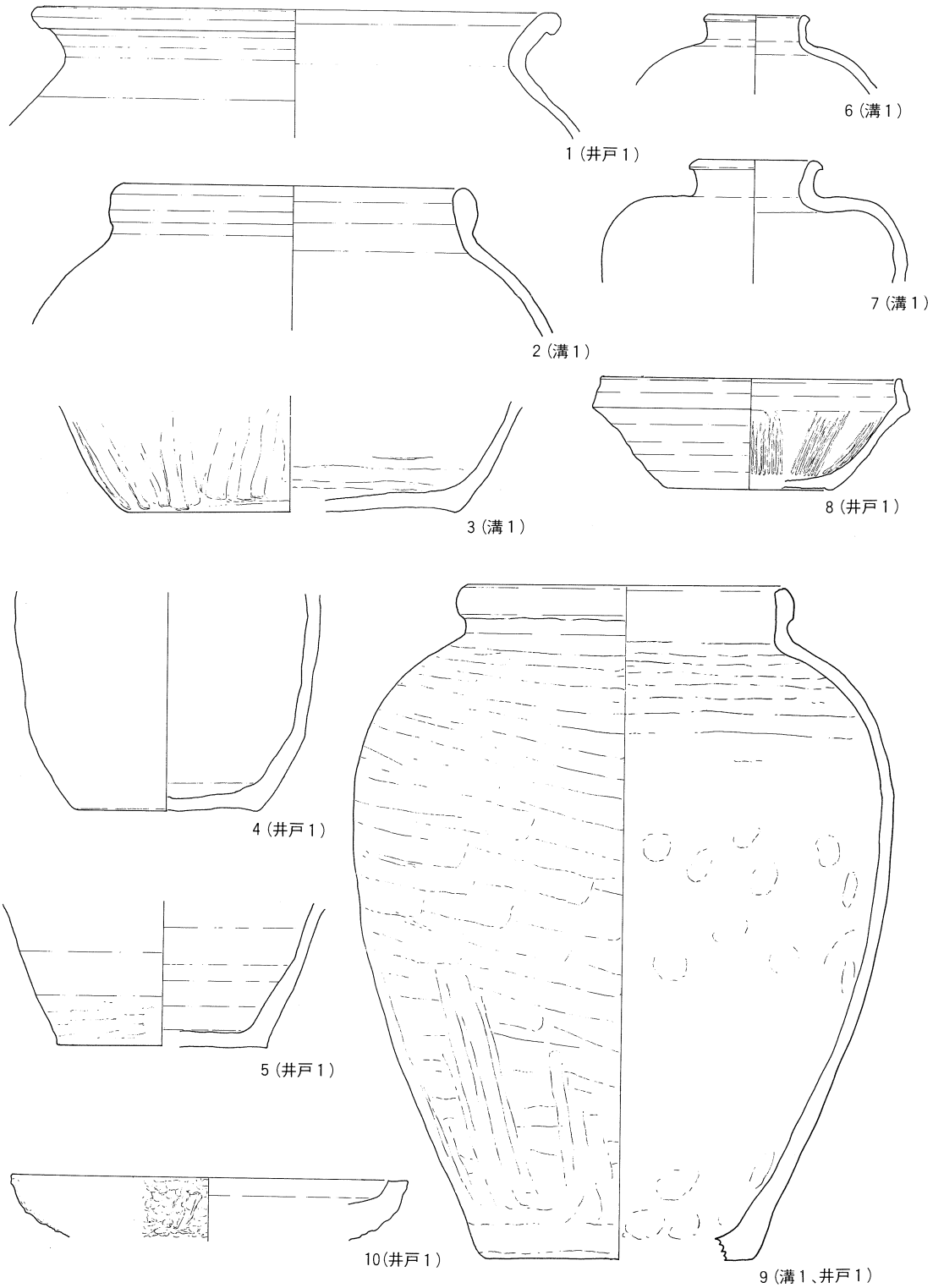


Fig.18　Ｂ－ａ地区井戸Ｉおよび溝Ｉ出土遺物（縮尺１：４、９のみ１：6）

6．稲荷遺跡Ｂ－ｂ地区

Ｂ－ｂ地区で発見された主な遺構としては、竪穴式住居跡ないしは竪穴住居状遺構４棟、コの字状溝７本等がある。また、発見遺物として、南端部で大形の打製石器（Fig.32－１）が弥生土器、須恵器片を含む黒色土２次堆積層下の褐色土中から発見された。

１号住居跡

直径７ｍの円形住居跡で２度の拡張痕跡をもっている。主柱構成は、当初４本柱でのち５本柱になったものとみられるが、両者の先後関係は明確でない。３本発見された壁体溝は内２本が先行し順次拡張したものとみられる。最終住居は、火災廃棄された可能性が強く、床面で赤く焼けた部分が広く広がっていた。南西部で野壺様の穴に切られており、中央部東よりに溝が走っているほか、長方形の土壙によって切られている。後二者はいずれも弥生後期前葉の遺構である。埋土中には弥生中期後葉の土器と後期前葉の土器が多量に発見された。床面出土の土器は少数であるがそれは中期後葉のものに限られ、住居の廃絶時期はその頃と考えられる。

２号住居跡

直径６ｍ弱の円形住居跡で、遺存状況は悪く、西半分の床面を残すのみである。中央部を現在の溝で大きくえぐられている。主柱構成は４本で中央穴を有す。中央穴は床面から深度約40㎝を測る。出土遺物は、床面から弥生中期土器が僅かに出土したほか、石庖丁完形品１点が発見された。

４号住居跡

遺存状況極めて悪く詳細不明の隅丸方形の住居跡と見られる遺構である。南西角の一部の床面及び壁体溝を残すのみで、中央穴はなく、主柱と見られる柱穴は発見されなかった。隅に浅い窪みがあるが、これは本住居に伴うものである。床面に弥生後期前葉の土器が発見され、後期前葉の住居であった可能性が強い。

７号長方形竪穴住居状遺構

短辺2.6ｍ長辺3.6ｍ程の長方形住居状遺構で約半分が遺存していた。最大遺存部壁高は30㎝ある。主柱穴とみられるものは床面にはなく良く焼け締まった炉が床中央部北よりで発見された。埋土中より弥生時代中期後葉の弥生土器が発見され少数ではあるがいずれも同時期のものとみてよく、中期後葉の長方形竪穴住居状遺構の一例に加えられる。

コの字形溝状遺構群

溝幅40㎝ほどで、長さ８～10ｍ程の両端が直角に折れまがる溝状遺構で段は持っていないが通常段状遺構とされるものに性格は共通する。これ等の溝に重なる柱群には、並行に一直線状に並ぶものがあり、溝と一連の遺構とみられるものがある。いずれも埋土中には弥生後期前葉の土器片を多く含み、ガラス小玉一点が発見されたものがある。

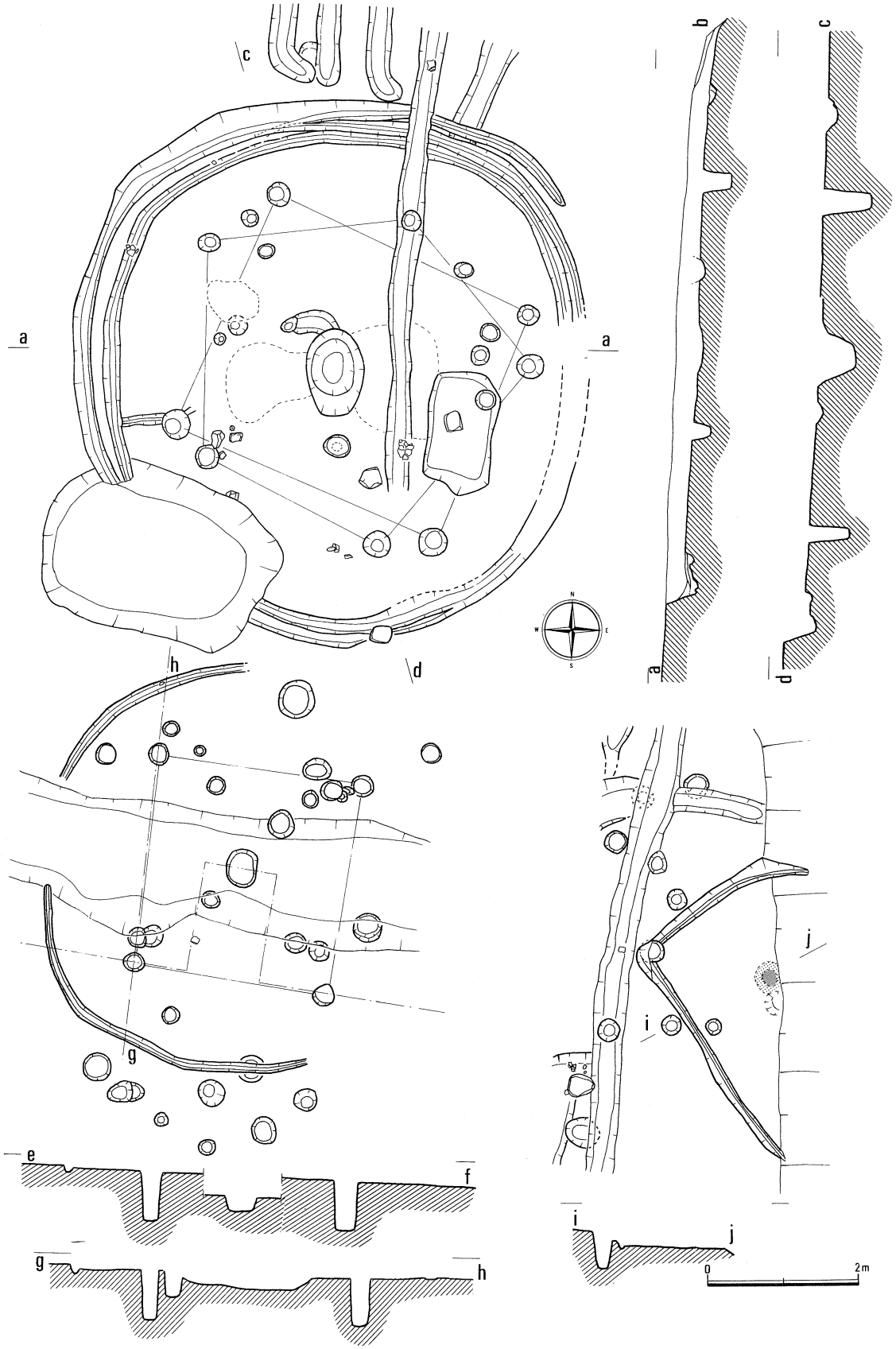


Fig.19　B－b地区1号·2号住居跡7号長方形竪穴住居状遺溝平·断面図（縮尺1：80，L H138.50m）

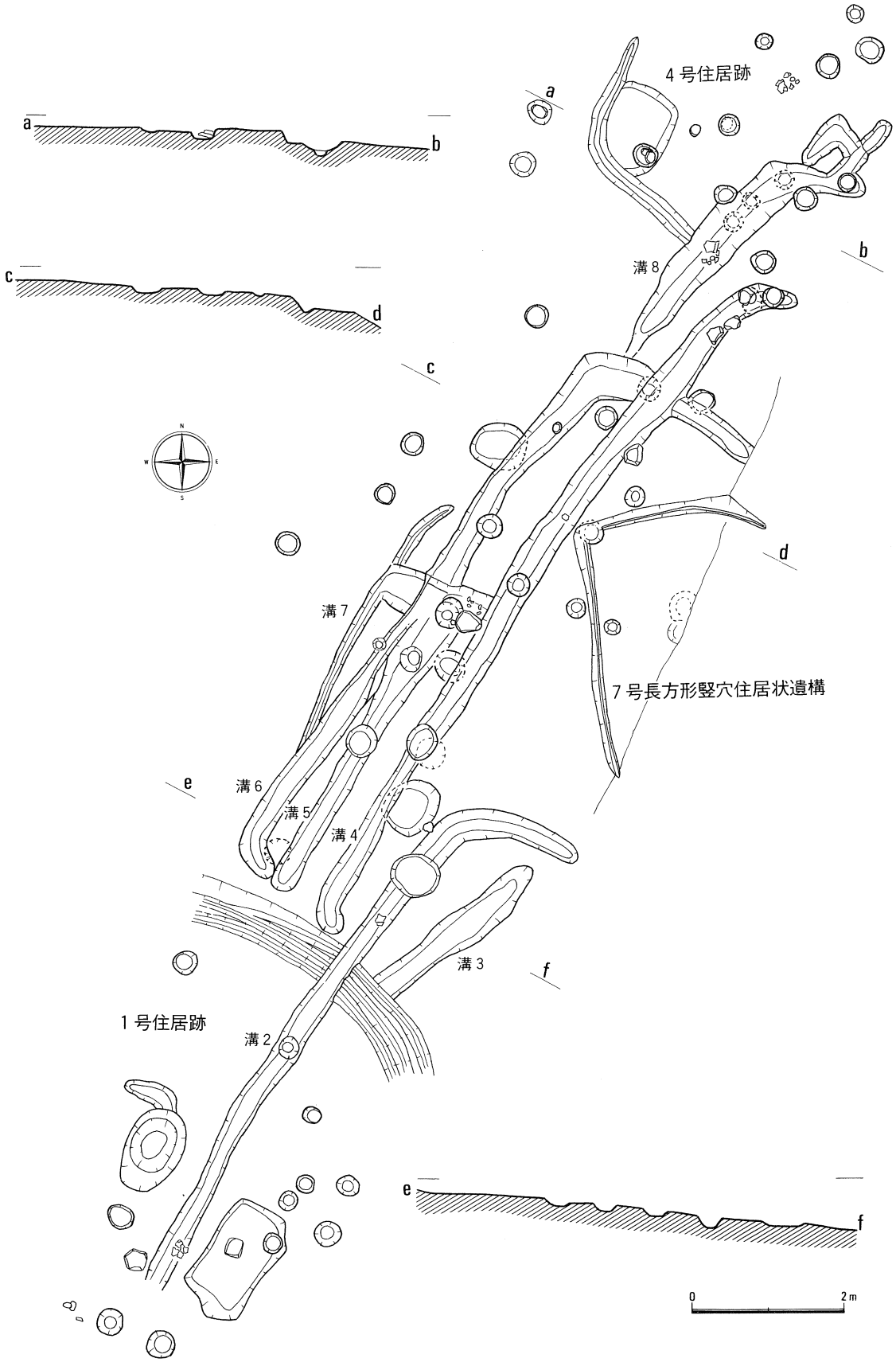


Fig.20　B－b地区溝平・断面図（縮尺1：80，ＬＨ137.50m）

7．稲荷遺跡Ｂ－ｃ地区

稲荷遺跡Ｂ－ｃ地区で発見された主な遺構には弥生時代竪穴式住居跡４棟（21、22、23、24号）、同溝状遺構、古墳時代鍛冶炉の下部遺構とみられるもの、近世の石組暗渠がある。

21号住居跡

直径約5.5ｍの隅丸方形ぎみの円形住居跡である。主柱は、４本柱で構成されている。中央穴は方形を呈し一部段を持っている。中央穴から斜面側に排水溝がのび外壁部は暗渠になって住居外方へ延びている。この溝と壁の交わる部分は一段底が窪んでおり、その部分に暗渠口を塞いでいたかのように平石一枚が残されていた。また中央穴の周りには炭の層が床面に広がっていた。出土遺物には弥生土器の他石錘、石庖丁等が発見された。

所属時期は後期初頭である。

22号住居跡

構造改善事業の掘削部端にその一部がかかった住居跡で、規模不明。隅の形状から、隅丸方形住居とみられる。火災廃棄されており、床面に炭化材および焼土細粒が残っ

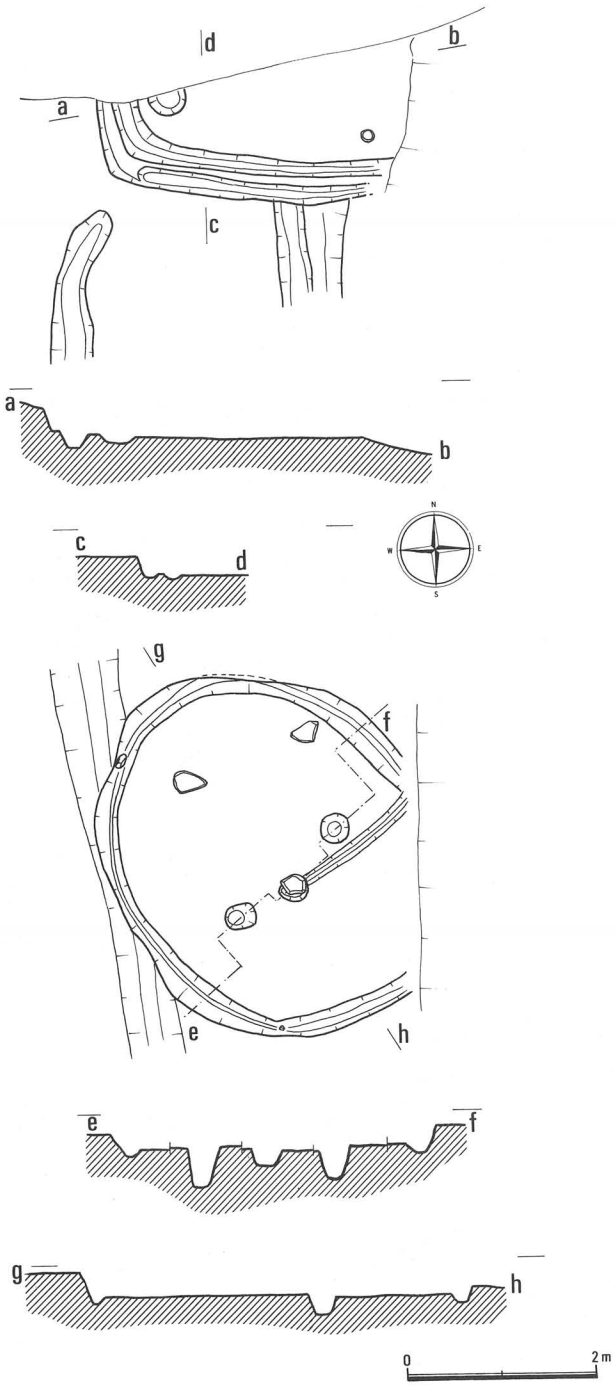


Fig.21　Ｂ－ｃ地区22号23号住居跡平・断面図
（縮尺１：80，ＬＨ135m）

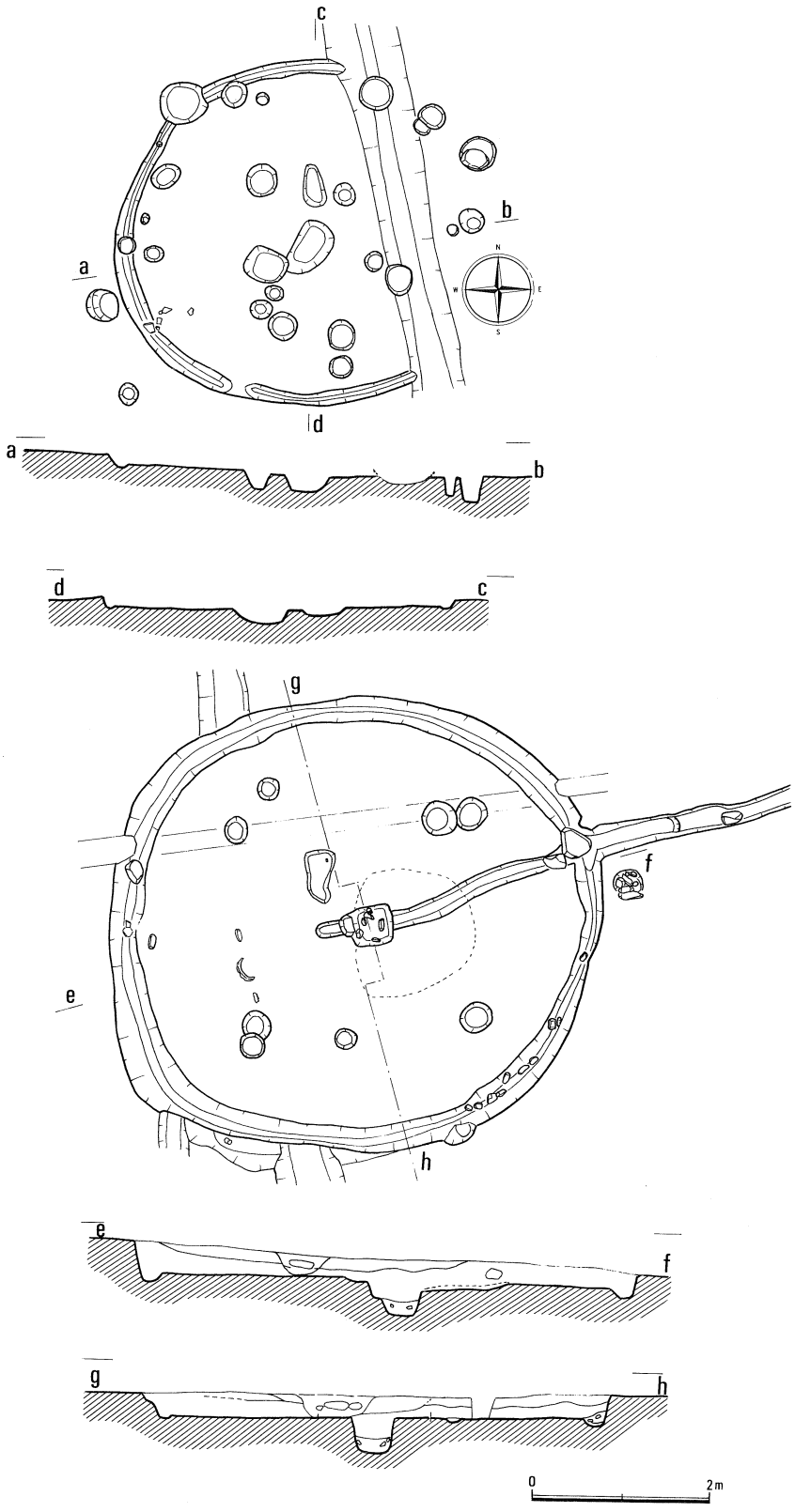


Fig.22　B－c地区21号23号住居跡平・断面図（縮尺１：80，ＬＨ135m）

ていた。一度の拡張痕跡を残し、内側に壁体溝があって、拡張の際に埋めたてられていた。発見された柱穴状のものは浅く、主柱ではなく、柱構成は不明である。埋土中に弥生後期前葉の土器片を含んでいた。なお住居斜面延長上に、石材に混じり陶棺小片が発見された。水田造成の際の埋土のなかとみられ、付近にかつて古墳の存在していたことが分かる。

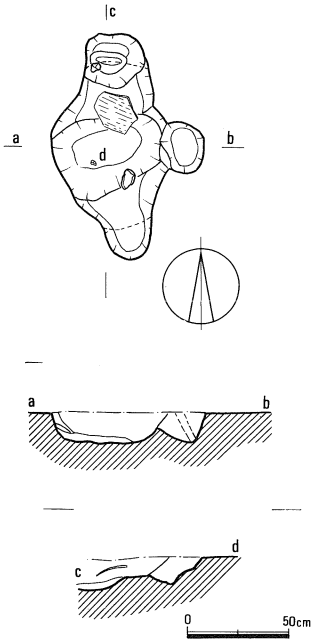


Fig.23　鍛冶炉状遺構平・断面図(縮尺1:40LH135.5m)

23号住居跡

直径４ｍの小形円形竪穴住居跡で、柱構成は不明である。床面内に柱をもたない種類の建築形式の住居であろうか。中央穴は長楕円で比較的浅い。中央穴中に口縁部は欠けるが壺形土器ほぼ一個体分の破片が残されていた。出土土器は弥生中期中葉に遡る可能性が強い。

24号住居跡

直径3.4～4.4ｍの楕円形小形住居跡で、床面に主柱穴が存在しない。中央穴は方形で極く浅い。

中央穴から斜面側に細い溝が床面に掘られている。床面に残されている柱２穴は深さ35～40㎝であるが、その位置からみて住居主柱ではなく中央穴の両側につく柱穴と考えられる。

埋土上面から切りこまれて、直径1.5ｍほどの穴があり、その底は住居床面上まで達している。この穴の中に弥生後期の土器片が多数遺存するとともに大小多量の石が投げこまれていた。住居に伴う土器片は弥生中期後葉である。

溝状遺構１、２、３

やや幅の広い溝状の遺構で、両端がコの字状に折れまがる。埋土に弥生後期前葉の土器を含む以外詳細は不明の遺構である。

鍛冶炉遺構

不整形の落ち込みで検出面からの遺存深度約20㎝弱である。床面には暗褐色土の薄い堆積があり、その上層には２次的堆積とみられる暗灰色土が上面まで充満していた。この暗灰色土層中には多量の炭が含まれており、須恵器破片、鉄滓、羽口とみられる破片が出土した。

床面自体には強く火を受けた跡はない。時期は明確にしがたい。

暗渠

南北２本東西１本の暗渠と見られる溝が発見された。西側の溝は南半平石、北半河原石を敷き並べ、東西は２列の側石のうえに石を敷きならべている。東溝には石の使用はない。

いずれも暗渠と考えられるが、何に伴う暗渠かどうか不明である。埋土中に微量の弥生土器

が含まれる以外遺物は無く、検出面で近世磁器を発見した。近世の暗渠であろう。

8　瓜生原小原Ｂ遺跡、草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区出土の遺物

（1）瓜生原小原Ｂ遺跡出土の弥生土器（Fig.24）

出土土器は、中期後葉から、後期前葉のものに限定された。両者の量的比較においては、圧倒的に後期のものが多く、中期に属するものは破片としては小片に属するものが大半である。

図示した出土土器の器種は、壺（Fig.24－１、２、４、11～13、24、27～30）、甕（Fig.24－５～17、20～23、25、26）、高杯（Fig.24－18、19、32～37）、蓋形土器（Fig.24－31）、器台（Fig.24－３、19）である。

壺

いずれも口縁端部を肥厚させ端面に数条の凹線文を巡らす。１は頸部下端に連続の刺突文を巡らす。

甕

５～10、14～17は、口縁端部を肥厚させ端面に数条の凹線文を巡らす。端面の拡張は斜め下方に強く貼りだすもの（例えば５）から上方に貼りだすもの（例えば16）までの間に様々なバリエーションがある。外面はおおむねハケ仕上、内面はヘラ削りである。

20～23は口縁端部を肥厚させるが、おおむね内湾させ凹線文は施文されない。外面はハケ仕上、内面はヘラ削りである。いずれも、外面胴部下半をヘラ磨で仕上げるものがある。

高杯

32、33は杯端部破片。端面に凹線文を巡らす。35は、これと同種の高杯下半部で櫛描沈線文で施文している。いずれも、連続成形法により作られており、杯底は、円盤充填法によって閉じられている。

18は、内湾した杯部を持つ高杯で端部外面及び拡張した端面に凹線文を巡らす。

蓋形土器

31は、蓋形土器つまみ部破片で内外面ハケ仕上ののちヘラ磨きが加わっている。

器台

３は、口縁部破片。拡張した端面に凹線文を多重に巡らし。さらに斜めの連続したキザミ目文を巡らしている。内外面ヨコなで仕上である。

19も口縁部破片。厚肥した端面に凹線文を巡らす。内外面ヨコなで仕上である。

（2）草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区出土の弥生土器

出土弥生土器の所属時期は、中期後葉から後期中葉までのものに限られている。量的には、中期中葉にさかのぼるとみられるものがＢ－ｃ区で少量発見されているが、中期後葉以降のものが圧倒的に多く、中でも後期のものが多くの割合を占める。

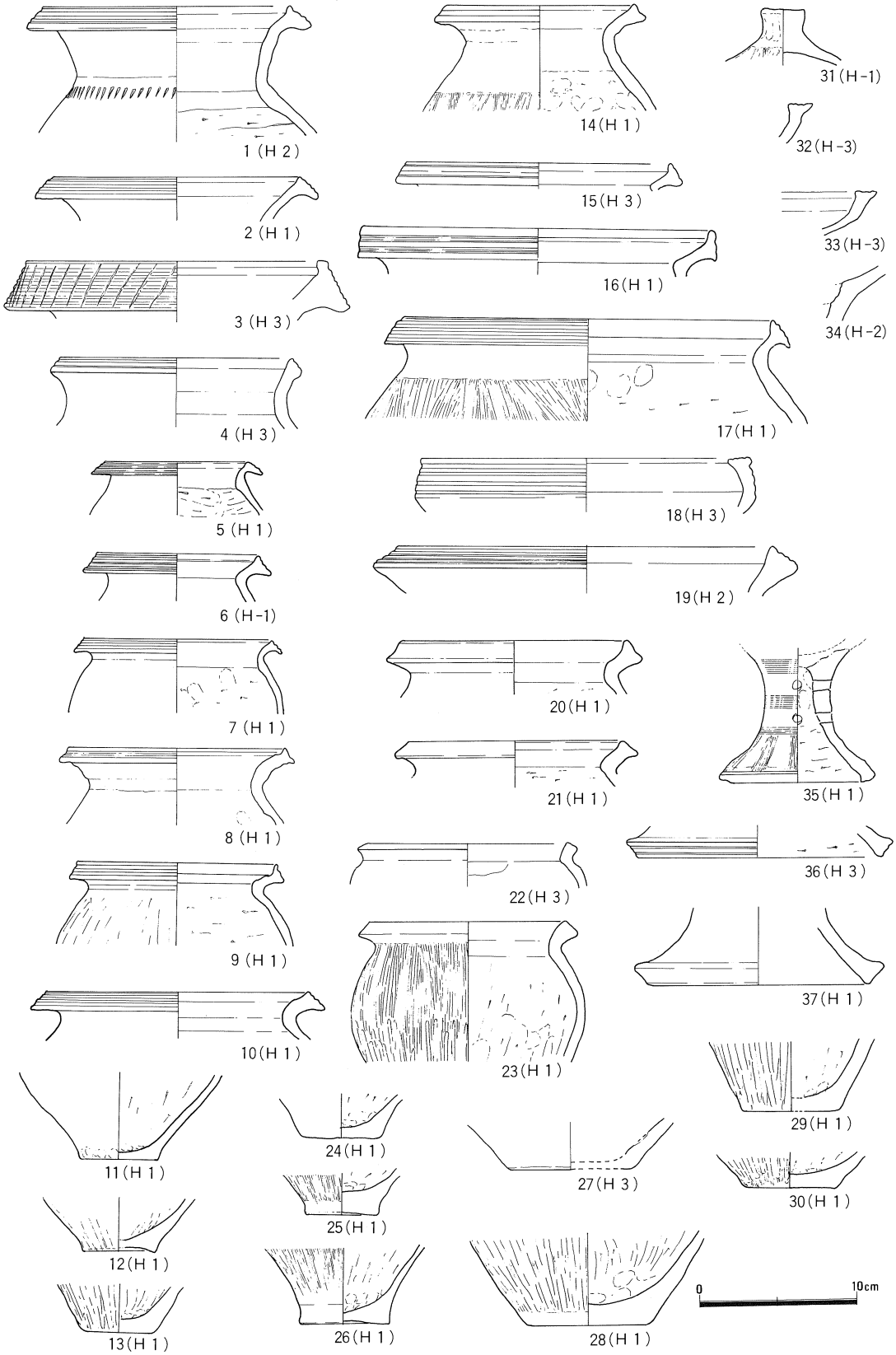


Fig.24　瓜生原小原Ｂ遺跡出土弥生土器（縮尺１：４）

これらのうち、Fig.25に壺形土器、Fig.26、27に甕形土器、Fig.28に高杯（1～12）器台（13～20）蓋形土器（21、23）台付壺（22）鉢形土器（24、25）を図示した。

壺形土器（Fig.25）

1は中期中葉にさかのぼる壺形土器で、頸部以下はほぼ完形に復元できた。口縁部は細片しか存在せず遺存状況も悪い。口縁外面には斜格子状にヘラ描沈線が一部残されている。胴外面中央部に連続刺突文を巡らす。外面はヘラ磨きにより仕上られているとみられるが遺存状況が悪く確認出来ない。内面は刷毛目仕上である。2は口縁端が垂下する特徴的な壺。端面に凹線文を巡らし、斜めの連続刻目文を施したのち円形浮文を貼りつけている。3～7は、ラッパ状に頸部を開き先端部を水平方向に拡張する長頸の壺で、口縁端面にいずれも凹線文を巡らしている。上端面は櫛描波状文、凹線文、円形浮文などで飾られる。10は短形壺で、肩部で強い屈曲を持つ。19、20は、同形態の壺形土器肩部破片。11～12は、口縁端を拡張し外面に凹線を巡らす後期の壺で胴部外面刷毛目仕上、内面ヘラ削り仕上である。14もほぼ同様な特徴をもつが口縁部外面に凹線を持たず痕跡的な段を持つ。13、15～18は直口の壺。15は、頸部下端に連続の刺突文を、16は口縁部端に連続に圧痕文を持つ。16は、ソロバ玉状の胴部屈曲をもつ小形の壺で外面はヘラ磨き、内面はハケ仕上である。

甕形土器（Fig.26、27）

Fig.26、1～5は、くの字に折れまがる頸部をもち、口縁部端をわずかに肥厚させる。4、5は端面に凹線文を巡らしている。6～23は、いずれも口縁部端を上下に拡張し、端面に2～数条凹線を巡らしている。胴部内面はいずれもヘラ削仕上、胴部外面はおおむね刷毛目仕上である。

Fig.27、1～13、15は口縁部を上下に拡張する甕形土器で、端面に凹線文を数条巡らしている。1、3は遺存状況が悪いため明確ではないが、本来は凹線数条を巡らしていたものであろう。14は直口の甕頸部下端に連続した刺突文を一巡させる。外面刷毛目仕上。内面はヘラ削りである。17、18は口縁部が直立して立ち上がる甕で、外面に凹線文帯を巡らす。19は、上方に強く立ち上がるいわゆる二重口縁の甕で、口縁部外面に櫛状工具により並行沈線文を巡らしている。胴部外面は刷毛目仕上、内面はヘラ削りにより仕上られている。なお29は鉢形土器。

高杯（Fig.28）

1～3は、内湾した杯部をもつ高杯杯部片で、内外面ともヘラ磨で仕上られている。端部は水平方向に拡張されており上端面には、凹線状の段を数条一巡させている。4、12は筒部、5～7、10、11は脚部である。

器台形土器（Fig.28）

13～20は器台形土器で、中期後葉から後期前葉のものである。20は、Fig.26－7の甕形土器に共伴して発見された。

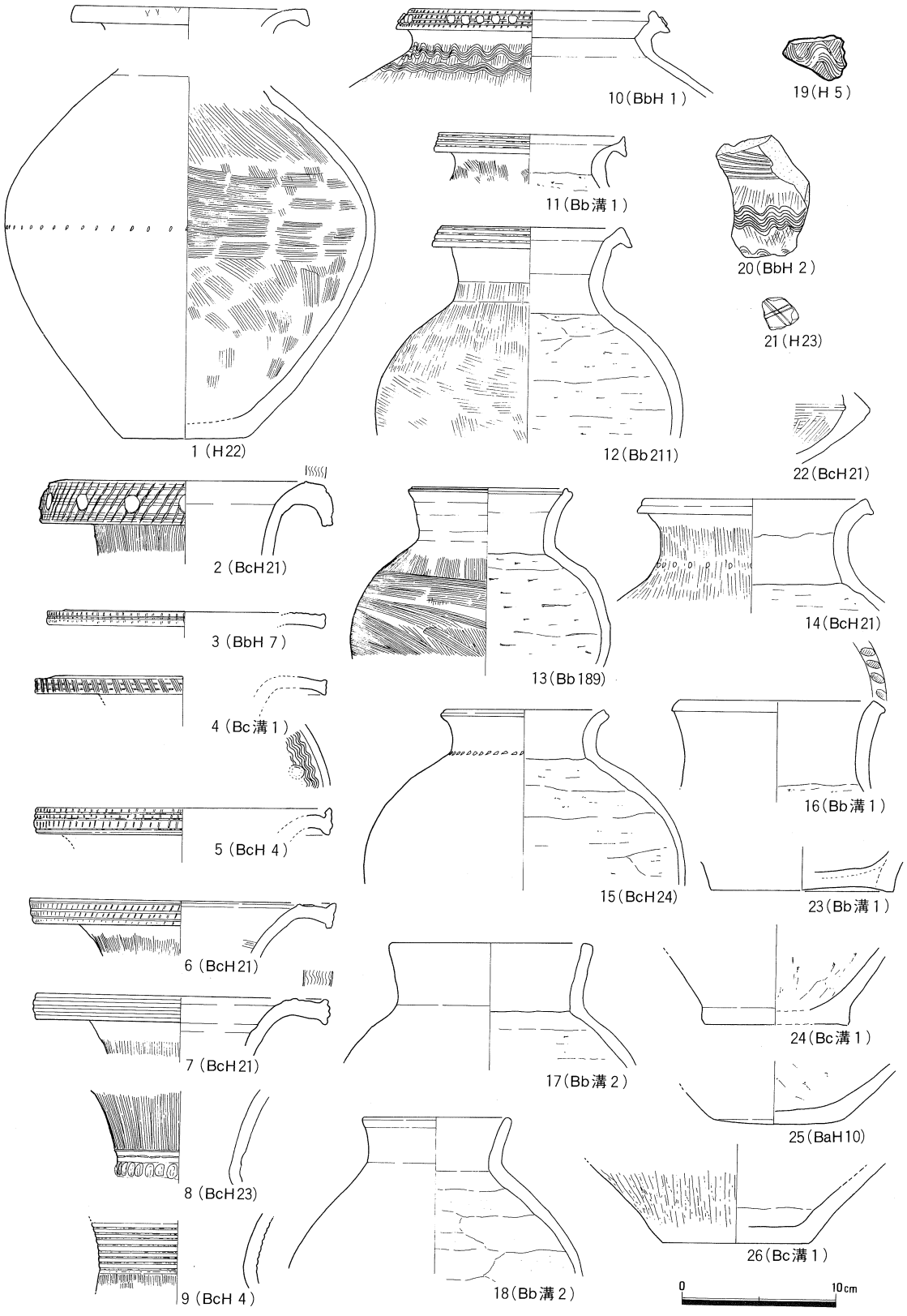


Fig.25　稲荷遺跡B、C地区出土弥生土器1（縮尺1：4）

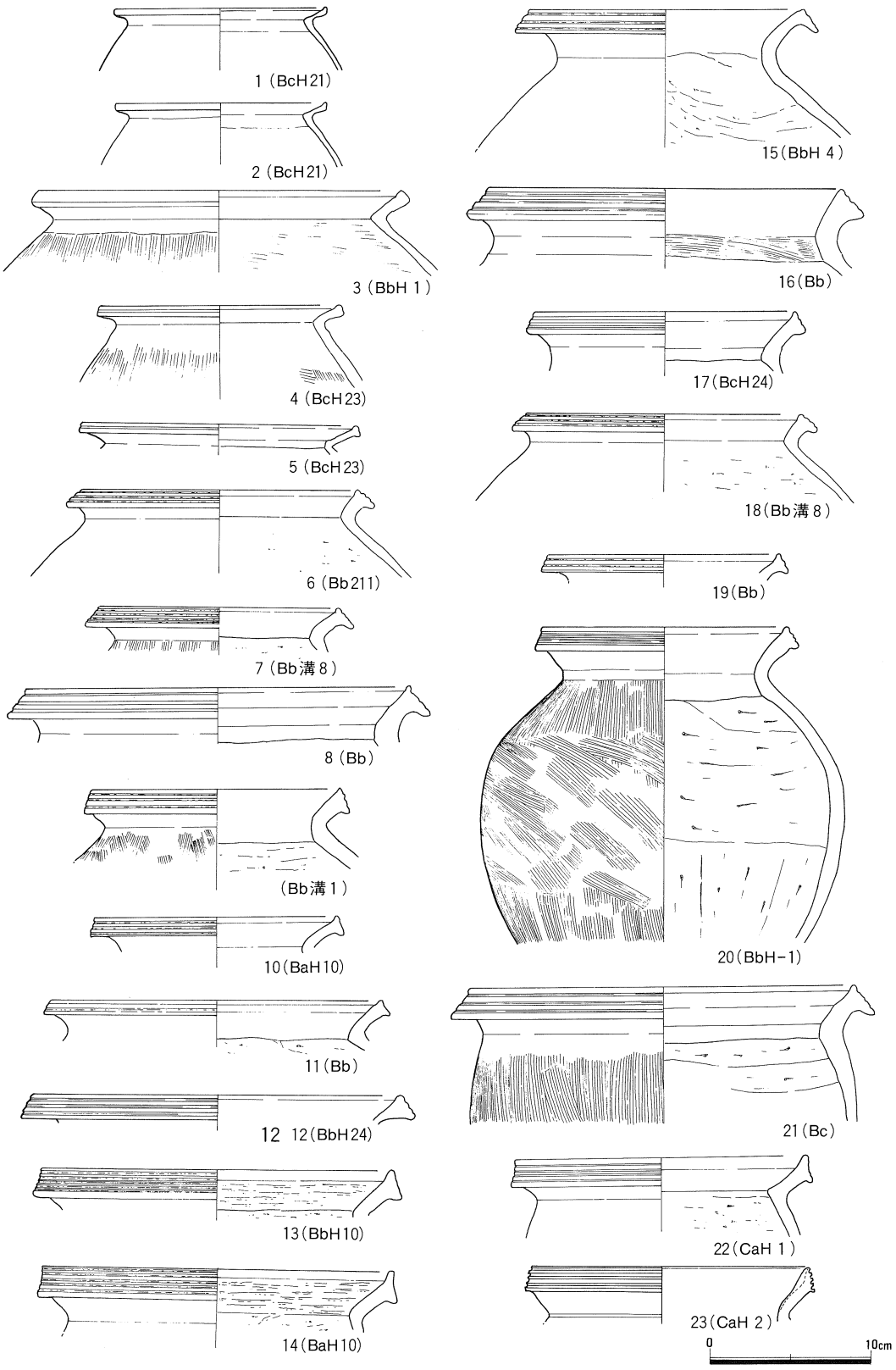


Fig.26　稲荷遺跡B、C地区出土弥生土器2（縮尺1：4）

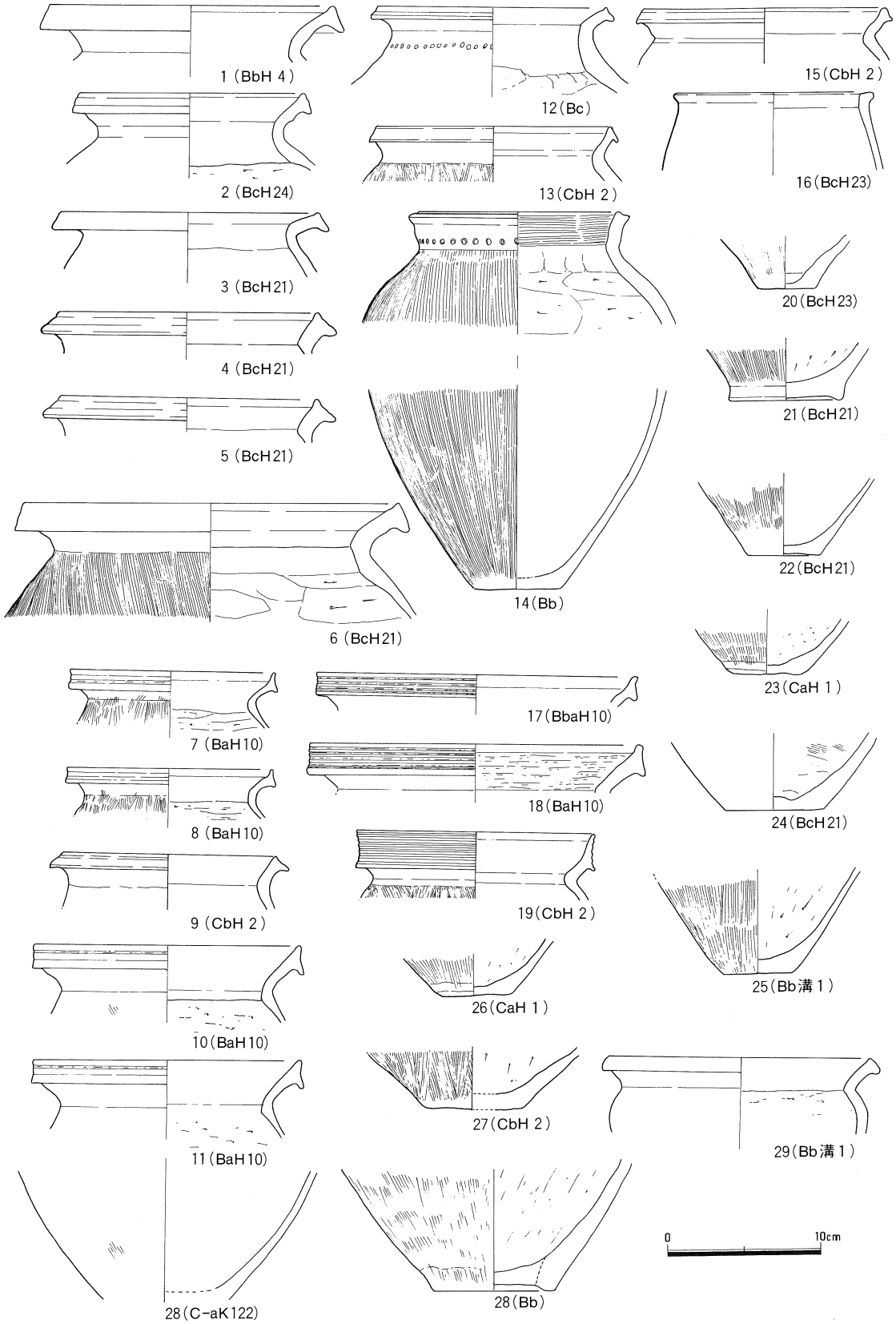


Fig.27　稲荷遺跡B、C地区出土弥生土器3（縮尺1：4）

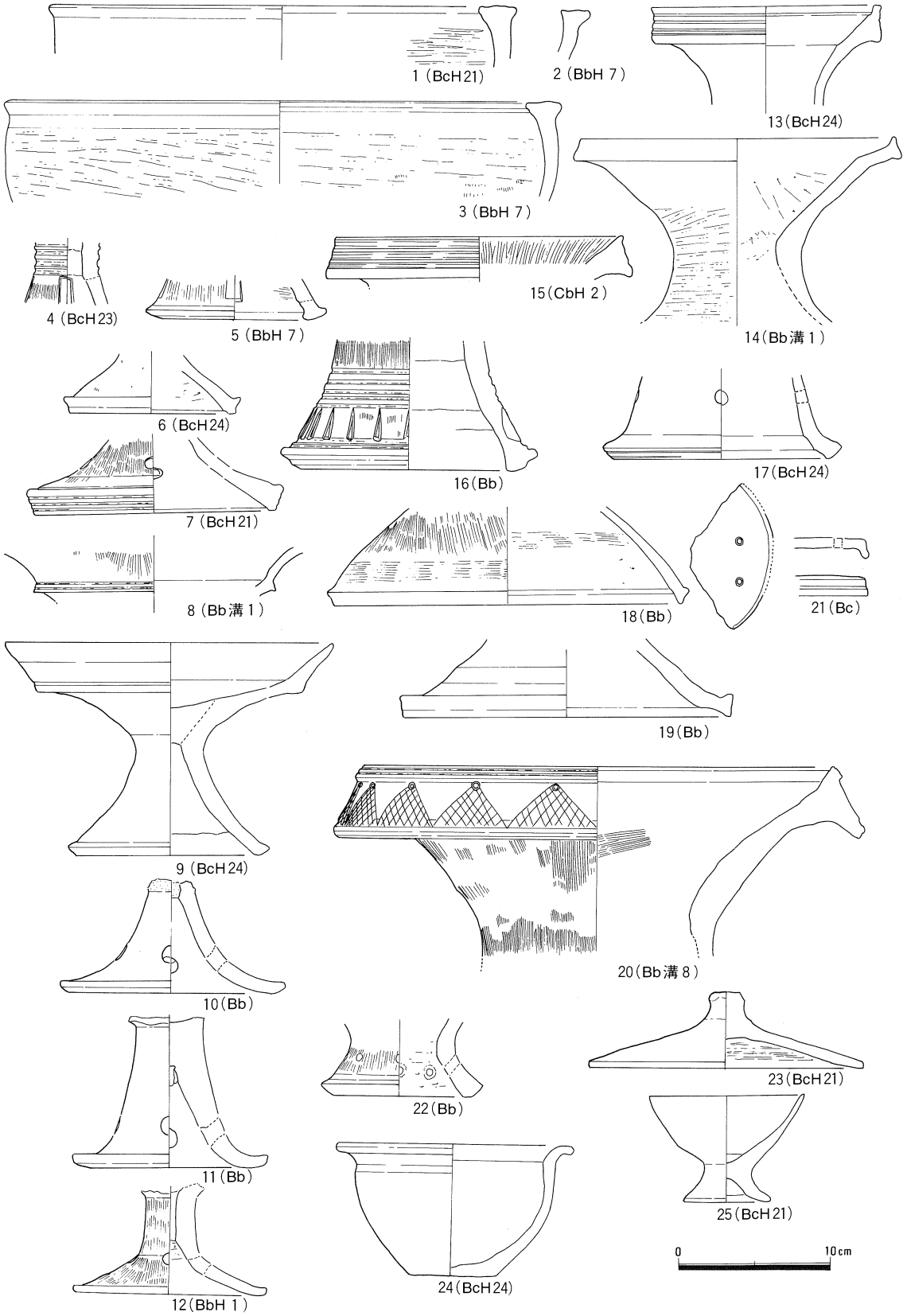


Fig.28　稲荷遺跡B、C地区出土弥生土器4（縮尺1：4）

蓋形土器（Fig.28）

21は、二孔の紐孔を残す。欠損部に対象に二孔存在したものであろう。23は内外面ヘラ磨き。

台付壺（Fig.28）

22は、脚部片。四孔の飾孔を有す。外面刷毛目仕上、内面ヘラ削り仕上である。

（3）瓜生原小原Ｂ遺跡、草加部稲荷遺跡Ｂ、Ｃ地区出土の石器及び鉄器（Fig.29、30）

Fig.29－1～6は石庖丁である。1、2、4、5は片岩系の石材を用いて作られている。3及び6は、粘板岩を用いて製作されたもので、搬入品とされるものである。5は未製品の破片で、製作途上で破損したため廃棄されたものとみられる。

7、8は砥石、9、10は石錘である。この種の石錘は火崗岩製のものが一般であるが、9は緑色片岩を素材としている。

11は、扁平片刃石斧であるが、石庖丁の破片を再利用したものである。

12は、太型蛤刃石斧の欠損品である。

Fig.30－1は、草加部稲荷遺跡Ｂ－ｂ地区南端部で発見された大形のサヌカイト製石器で、通常無遺物層とされる褐色土層上部に下半を沈め、上半を須恵器包含層である灰黒色土層にのぞかせていた。旧石器時代の尖頭器とみるみかたと、石核とみる見方がある。表面はやや風化が進んでいる。遺存部全長は21.7㎝、幅7.4㎝、厚さ4.3㎝を測る。断面形態は台形を呈している。縦長の干板面に、数回の搞打がおこなわれ、その後側面から順次打撃が加えられている。

2は、1と同じく草加部稲荷遺跡Ｂ－ｂ地区で発見されたものであるが、排土中からの発見で出土状況は不明である。サヌカイト製の有茎尖頭器である。尖端部は欠損していた。

なお、草加部稲荷遺跡Ｂ－ｃ地区23号住居跡の埋土中から、黒耀石の細片が一片発見されている。

3は、草加部稲荷遺跡Ｂ－ａ地区10号住居跡の最終住居床面から発見されたもので、後期前葉のものとみてよい。

4は、瓜生原小原Ｂ遺跡の1号住居跡埋土中より発見されたガラス製とみられる管玉で、一部欠損している。

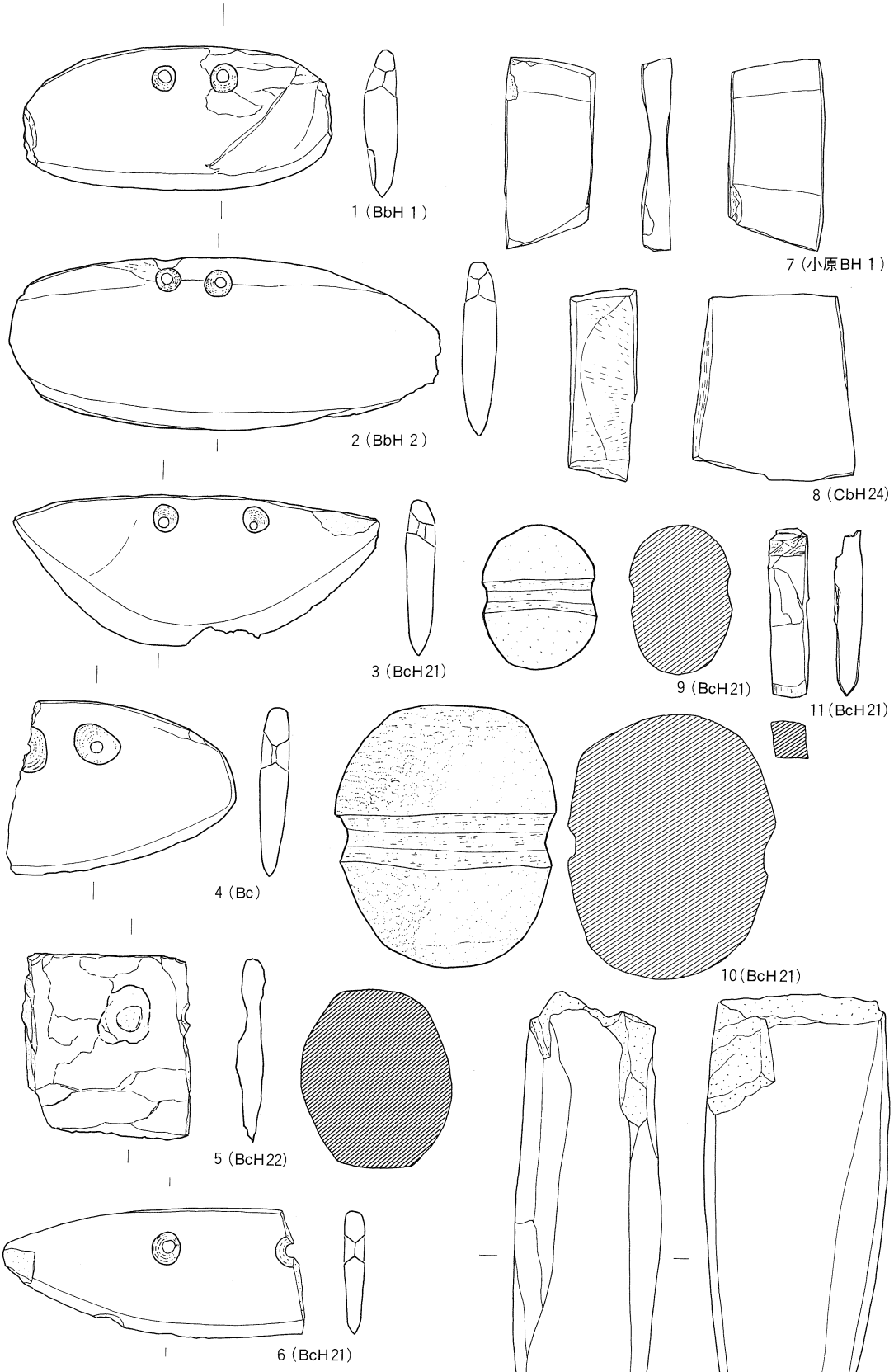


Fig.29　瓜生原小原Ｂ遺跡、稲荷遺跡Ｂ、
Ｃ地区出土の石器（縮尺１：２）

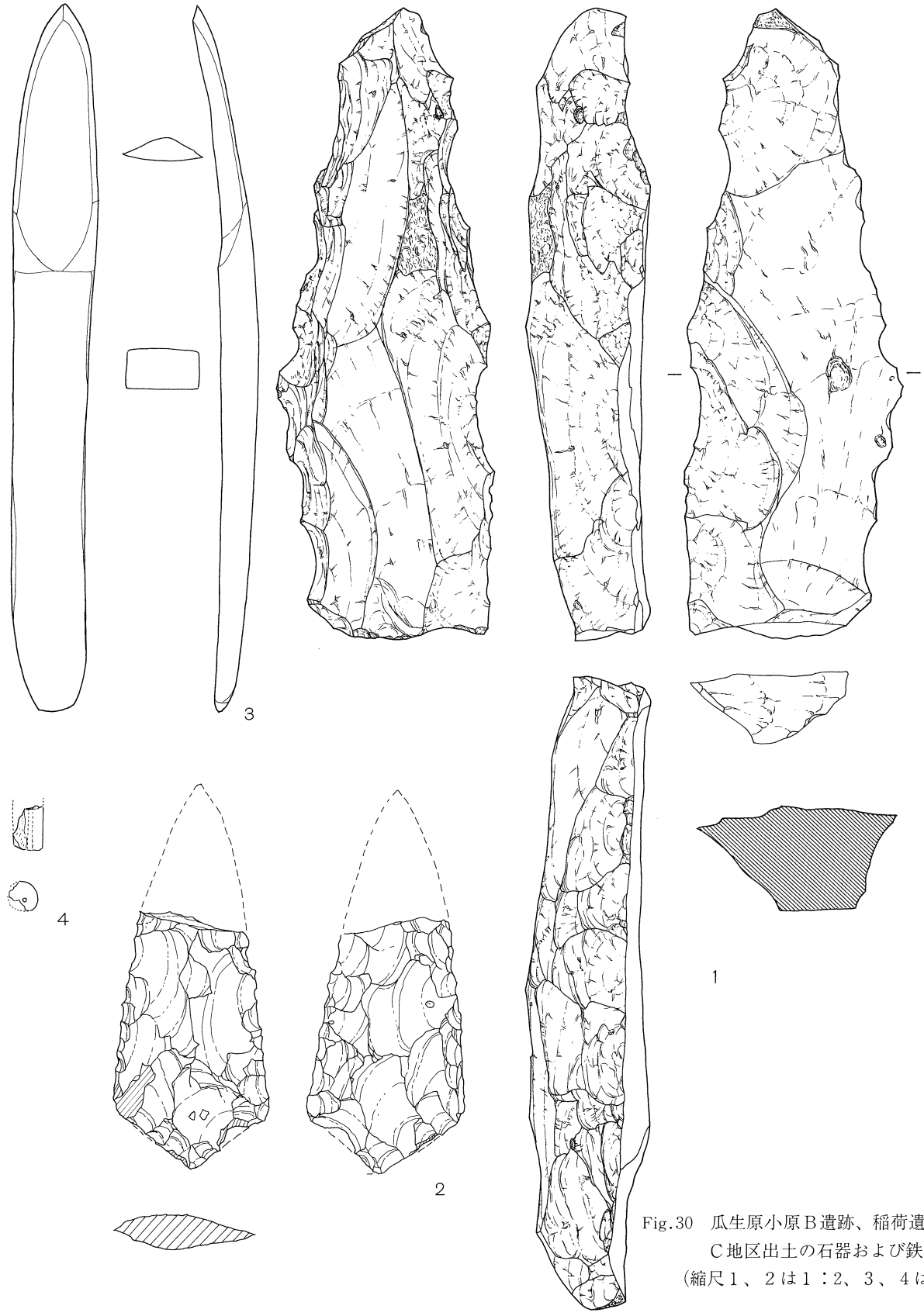


Fig.30　瓜生原小原Ｂ遺跡、稲荷遺跡Ｂ、
Ｃ地区出土の石器および鉄器
（縮尺１、２は１：2、３、４は原寸）

9　草加部稲荷遺跡Ａ地区

住居址１（Fig.31）

調査区の北側角部分から検出された。径約5.0ｍを測る。隅丸方形を呈する竪穴式住居である。柱穴は４本からなり、柱間はほぼ一定である。床面の中央には楕円形の中央穴があり、深さは約50㎝を測る。床面には壁体に沿って、壁体溝がめぐる。

床面には厚さ約５㎝の張り床が認められ、その下位から径約4.0ｍの隅丸方形を呈する、旧住居址が検出された。建て替え後も４基の柱穴及び中央穴は共有している。周囲には壁体溝がめぐっているが、北側の一部は失われている。

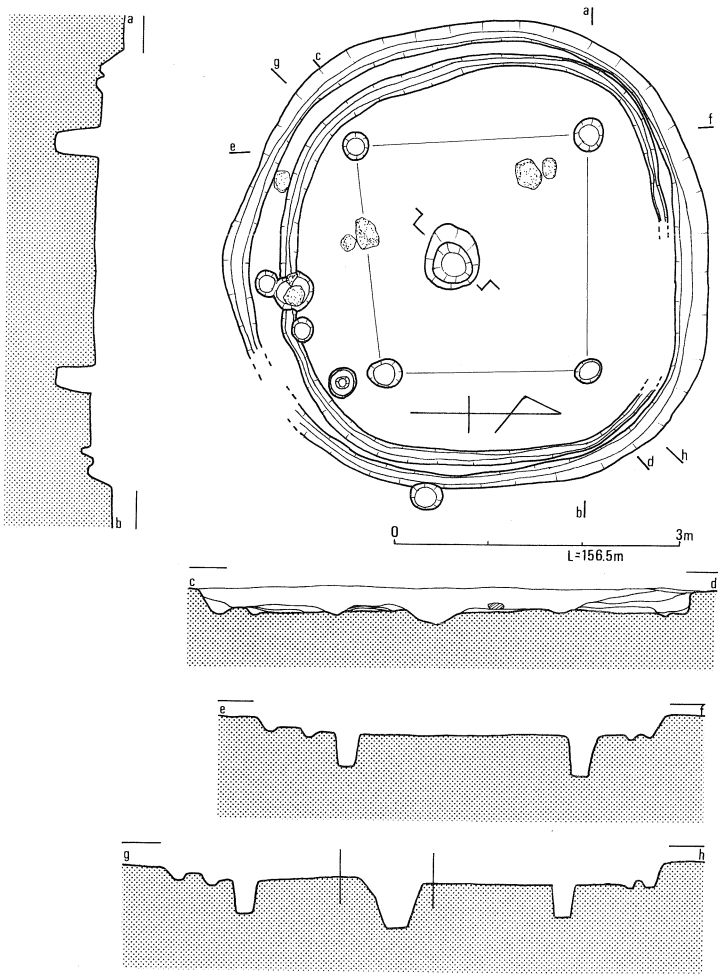
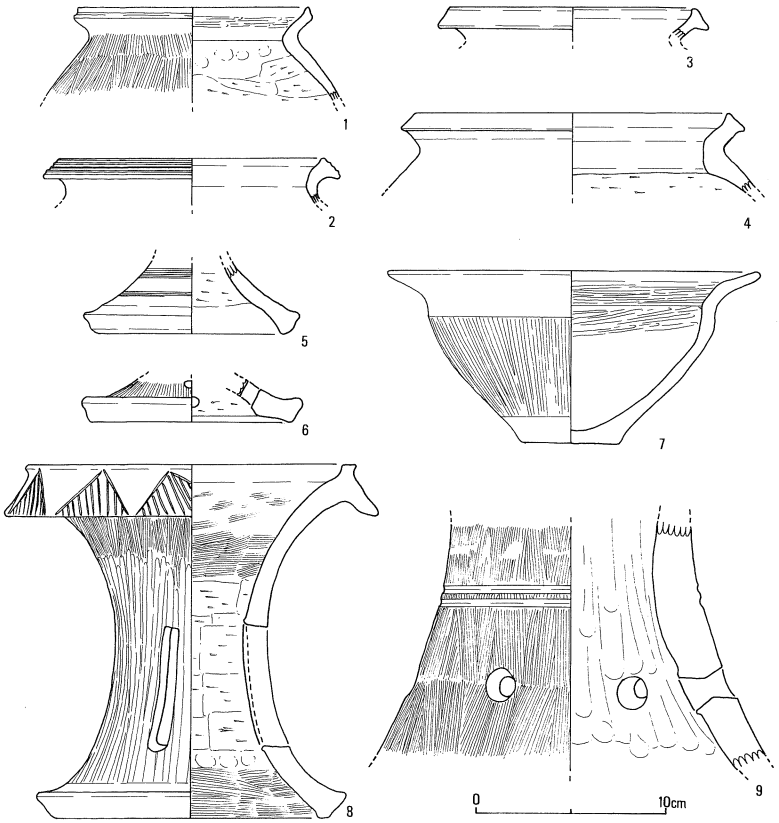


Fig.31　住居址１平・断面図（Ｓ＝１：80）

出土遺物等の観察から、本住居は弥生時代後期に属するものと考えられる。

住居址１出土遺物（Fig.32）

図示できるものは９点である。１～３は甕形土器の口縁部片である。「く」の字状に外反し、端部は上下に拡張するもの、上方につまみあげるもの、また、端面には凹線を施すもの等、さまざまである。４は壺形土器である。いずれも内面調整は頸部付近にまでヘラケズリが及んでいる。５・６は高杯形土器もしくは台付土器の脚部片である。７は鉢形土器である。体部から緩やかに外反し、口縁部付近で更に外方へ張り出している。外面調整は口縁部と底部付近はヨコナデであるが、その間はタテハケである。内面は口縁部付近にヨコ方向のヘラミガキが認められる。８・９は器台形土器である。８は筒部中位に約８㎝を測る最小径部を持ち、口縁部で17.5㎝、脚部径で15㎝を測るものである。口縁部は端部で更に上方へわずかに、下方へかなり



拡張しており、端面には鋸歯文が施されている。筒部のやや下位に縦長の穿孔が3方向に認められる。外面調整はハケ目地文にタテ方向のヘラミガキである。内面には中位にヘラケズリ、その上下には横方向のハケ目が認められる。9は器台形土器の破片である。6方向に円形の穿孔が認められ、外面はタテハケ、内面は指によるナデ上げである。

Fig.32　住居址1出土遺物（S＝1：4）

住居址2

住居址1の南側に住居の壁体溝が一部確認され、周辺から弥生土器が出土していることから、上部が削平された住居址であると推定されるものである。柱穴及び中央穴がどれに対応するかは不明である。規模は壁体溝の弧のカーブ等から、住居址1とほぼ同様のものと推定される。所属時期は、出土遺物等から弥生時代後期であると考えられる。

住居址2出土遺物（Fig.33）

図示できる土器は4点である。1は甕形土器で口縁部径約17㎝を測る。2は鉢形土器で、胴は球形を呈し、口縁径は18㎝を測る。いずれも内面のヘラケズリは口縁部の屈曲部にまで及んでいる。3は高杯形土器である。杯部と脚部の接合部分は差し込み式になっている。杯部外面にはヘラミガキ、内面にはわずかにヘラケズリが認め

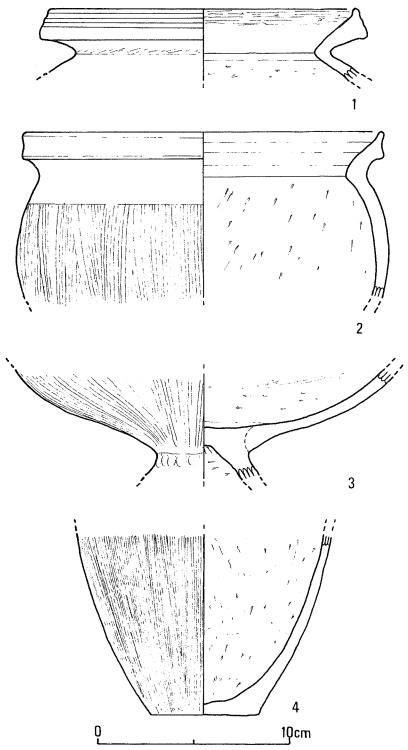


Fig.33　住居址2出土遺物（S＝1：4）

られる。４は甕形土器の胴部下半である。外面はタテハケ、内面にはヘラケズリが認められる。

住居址３（Fig.34）

住居址１の南々東12m離れた場所から検出された。径が5.0～5.5mを測る円形の竪穴式住居である。柱穴は４基からなり、柱間は北側がやや狭くなっている。床面中央には中央穴が認められるが、土壙５と重複して検出された。床面には張り床が認められ、その下位からは旧住居址が確認された。壁体溝は建て替え時に造り替えているが、中央穴及び柱穴は共有している。土壙５は建て替え時に張り床と同時に埋められており、旧住居の時期に住居の１施設として利用されていた可能性がある。住居南側の外部には外方へ伸びる溝が検出されたが、現代の水田の削平によってほとんど失われている。

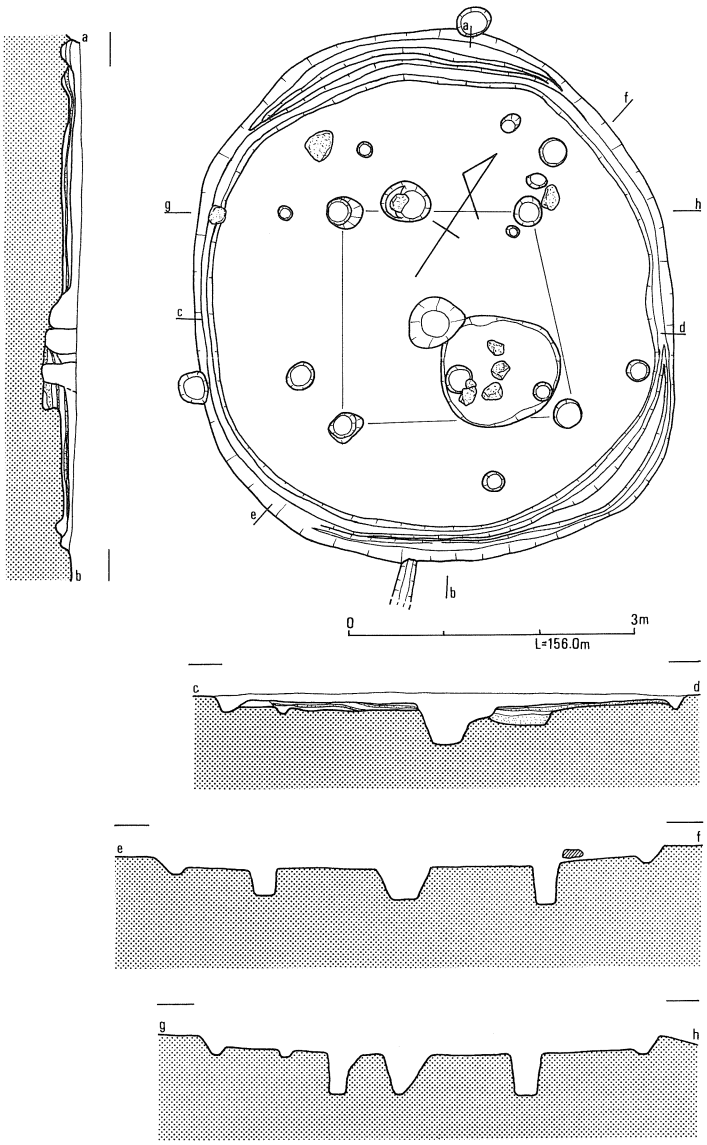


Fig.34　住居址３平・断面図（S＝１：80）

本住居の所属時期は、出土遺物等から弥生時代後期に当たるものと考えられる。

住居址３出土遺物（Fig.35）

図示できる土器は７点である。１・２は壺形土器で、１は頸部をもち、外方へ更に拡張するもの、２は「く」の字状に外反し、そのまま端部を丸く収めてしまうものである。内面のヘラケズリはいずれもかなり上位にまで及んできている。３は甕形土器である。口縁径は13cmを測り、胴部最大径はやや上位にもっているが、口縁部以上にはならない。外面調整はタテハケで、口縁部周辺のみがナデられている。内面はタテもしくはヨコ方向のヘラケズリで、径部付近にはヨコ方向のヘラミガキが認められる。４は甕形土器もしくは壺形土器の底部片である。外面

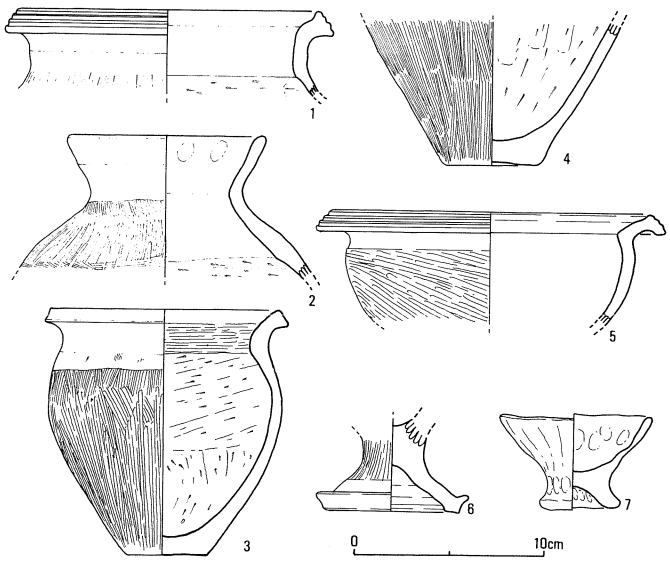


Fig.35　住居址３出土遺物（Ｓ＝１：４）

はタテハケ、内面はヘラケズリである。５は鉢形土器である。緩やかに立ち上がったのち、さらに外方へ屈曲し、端部は上下にやや肥厚し、端面に凹線文を施している。外面は斜方向のヘラミガキである。６は台付土器の台部である。「ハ」の字状に開き、端部はやや上方へ拡張している。径約８㎝を測る。７は台付鉢形の手づくね土器である。口縁部径約８㎝を測る。

住居址４・５（Fig.36）

調査区の東側隅から２軒が一部重複した状態で検出した。北側を住居址４、南側を住居址５とした。床面のレベルは住居址５の方が低くなっているが、土層及び出土遺物の観察等から住居址４が弥生時代後期、住居址５が古墳時代の所産と考えられる。

住居址４は径５ｍの円形竪穴式住居である。柱穴は４基からなり床面の中央部には中央穴が検出されている。その東南側の床面のわずかな高まりが認められた。床面には張り床が施され、その下位から、旧２回の住居址の壁体溝が確認された。順序としては、最小住居址から最大住居址へと順次拡張していったものと、土層断面等から判断される。

住居址５は１辺５ｍを測る方形の竪穴式住居である。２分の１が調査区にかかっており、残りの部分は調査区外であるため未調査である。壁体にそって壁体溝がめぐっており、特に東側部分においては２本に増えている。そのことから、少なくとも１回の建て替えが想定されるものの、その新旧関係については埋土が単一土層であるため不明である。床面には４基の柱穴が検出されたが、いずれも整然と並ぶものでなく、所属関係等は不明である。

住居址４・５出土遺物（Fig.37）

１～18が住居址４の、19～24が住居址５の出土遺物である。

１～７は壺形土器である。その形態・大きさはさまざまで、肩部から直立気味に外反して端部を丸く収めるもの、端部を肥厚させ端面もしくは頸部に凹線文をもつもの、頸部を列点文で加飾するもの、一度外反し再び立ち上がる２重口縁状のもの等が認められる。外面の調整はタテハケが基本で、頸部の内面にはヨコ方向のヘラミガキが認められるものがある。８～13は甕形土器である。口縁部は肩部から「く」の字状に鋭く外反し、端部を肥厚させ、端面に凹線文を持つ者と持たない者の２者が認められる。内面のヘラケズリはかなり上位にまで及んでいる。

内面屈曲部以上にはヨコ方向のヘラミガキが認められるものがある。14・15は甕形土器のつまみ部分である。つまみの径は14で3.5㎝、15で1.5㎝を測る。16は鉢形土器である。体部は緩やかに立ち上がり更に外方に開いて口縁部となる。外面は体部下半でタテ方向の、上半はヨコ方向のヘラミガキである。内面は体部下半がタテ方向の、上半がヨコ方向のヘラミガキである。17・18は壺形土器もしくは甕形土器の底部である。外面調整はいずれもタテ方向のハケ目であるが、内面はタテ方向のヘラケズリで、17についてはユビによるナデが認められる。

19・20は甕形土器である。屈曲部はかなり鋭角に「く」の字状になっており、端部は丸く収めている。調整については、外面はタテハケ、内面の口縁部はヨコハケで、胴部については指によるヨコ方向のナデが認められる。21・22は高杯形土器である。杯部は口縁部径で13㎝を測り、下位で屈曲し立ち上がる。外面はタテ方向のヘラミガキで口縁部と屈曲部はナデられている。内面は上半にヨコ方向のヘラミガキが認められる。脚部は軸の中位がやや膨らみ、接地点付近で急激に外反して端部に至る。径は10.5㎝を測る。23・24は住居址5の埋土中から出土しているが、住居址4の流れ込み遺物であるものと考えられる。23は甕形土器であり、24は甕形土器もしくは壺形土器の底部片である。

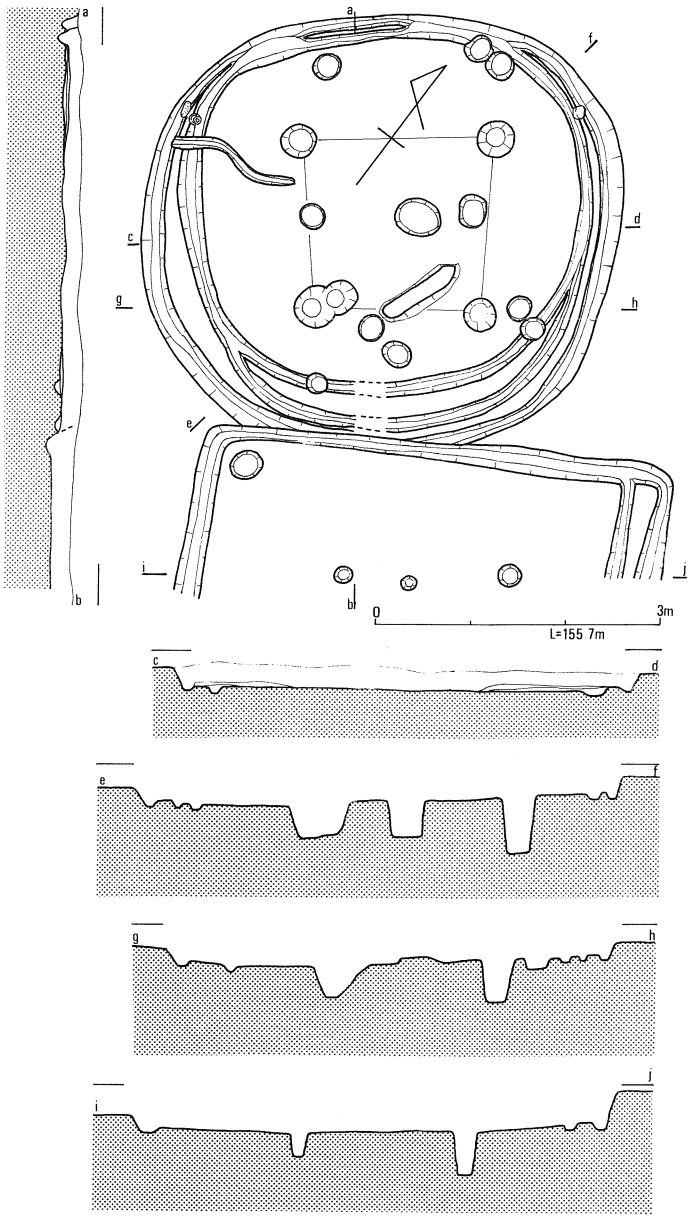


Fig.36　住居址4・5平・断面図（S＝1：80）

その他の遺物（Fig.38）

1～7は弥生時代の土器で、1～3は住居址3内部の土壙5の埋土中から出土している。た

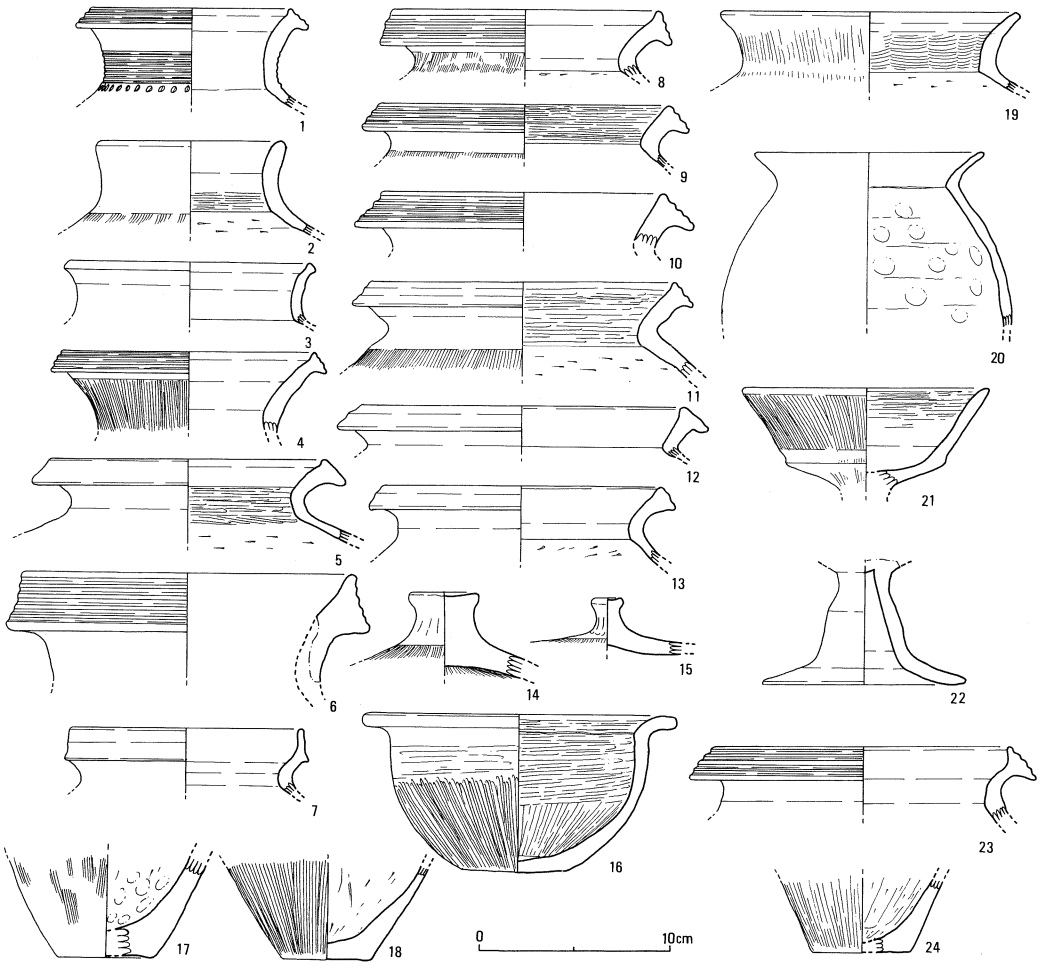


Fig.37　住居址４・５出土遺物（S＝１：４）

だし、３については弥生時代中期の土器であるので、流れ込みの可能性が指摘される。４・５は住居址３周辺からの遊離遺物、６・７は住居址２周辺の試掘調査時に出土したものである。８・９は古墳時代の須恵器で、８は住居址４の埋土中から、９は住居址５の埋土中から出土している。特に８については耳付椀形をしており、文様のあり方からもかなり古い時期の所産である可能性がある。10～19は中世の勝間田焼である。10～15は小皿であり、いずれも底部は回転糸切りである。16～19は椀形土器であり、暗青灰色を呈する。勝間田焼の一群については主に住居址３の周辺から集中的に出土している。

20～27は磨製石庖丁である。23のみ石英片岩製であるが、他はいずれも粘板岩製である。20は住居址１から、21・22は住居址３から、23・25は住居址４から、26は住居址５の埋土中から出土しており、他は遊離遺物である。28は住居址４から出土した、周囲に搞打によって溝をつけた石錘である。また、35は両端部に切り目をいれた石錘であり、住居址３から出土している。29は遊離遺物として、30は住居址１から出土している砥石である。いずれも長軸の４面につい

て、全て研磨面をもっている。

31は装飾土玉である。住居址２周辺より遊離遺物として出土した。ほぼ全面にわたり小孔をあけている。32～34は土錘である。いずれも住居址３の周辺のピット内から出土している。

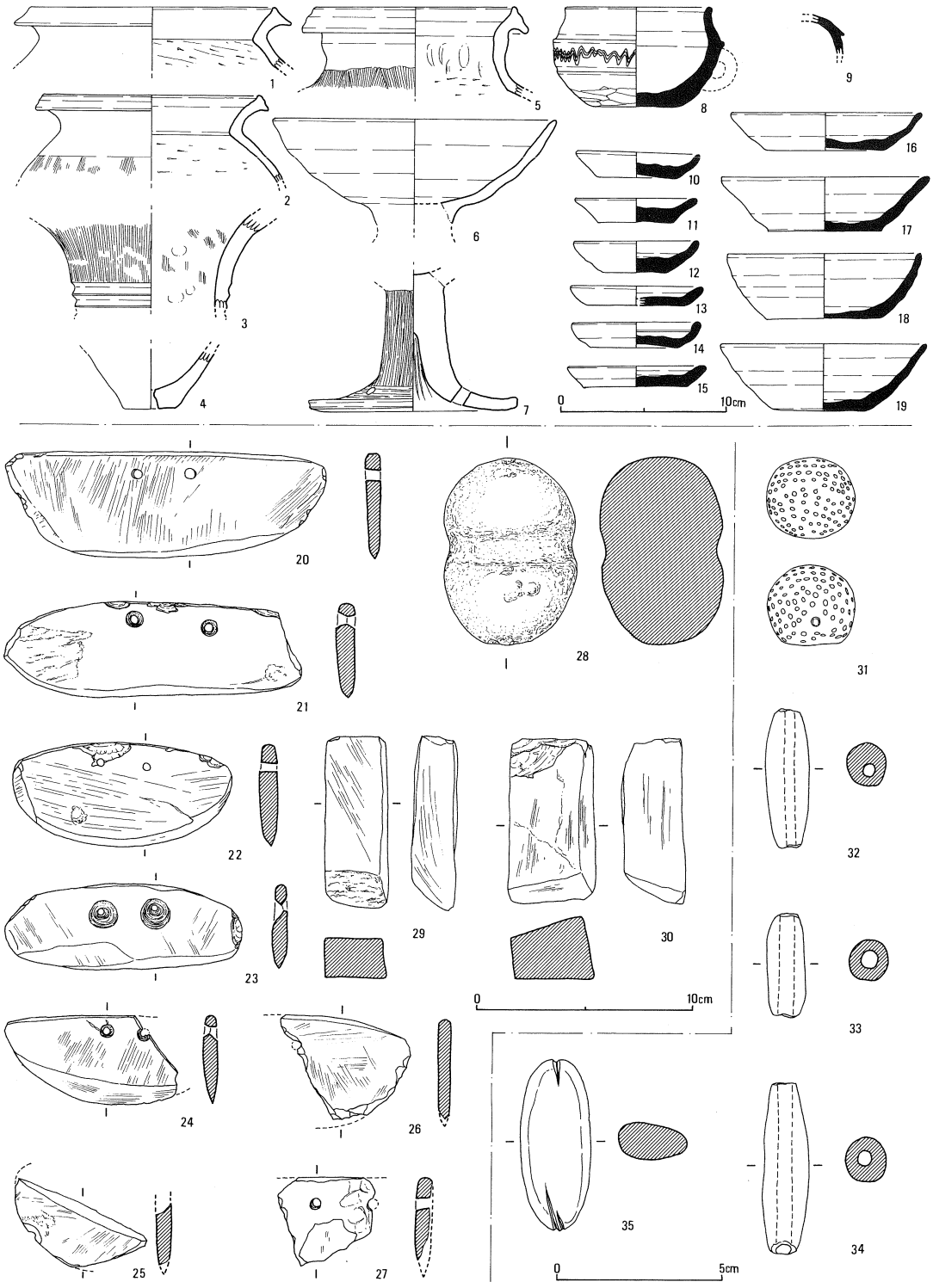


Fig.38　その他の出土遺物（１～19；S＝１：４,20～30;S＝２：３,31～34;S＝１：２）

第4章　要　　約

弥生時代集落の存在様式にしぼって、以下小原Ｂ遺跡と草加部稲荷遺跡を対比し要約をこころみたい。

小原Ｂ遺跡

弥生集落の継続幅は、中期後葉から後期前葉までに限定される。調査面積が狭小なため正確は期しがたいが、確認調査による試掘範囲でもこれ以外の時期に属する弥生土器は発見されていない。

立地条件は、丘裾の平地部に位置しているといえるが、遺構のありかた、出土土器の様相からみて、短期廃絶型の集落の様相を呈している。

東方丘陵上には、津山中核工業団地建設に際して発掘調査された弥生集落遺跡が点在し、崩レ塚遺跡では中期中葉にさかのぼる遺構が発見されているが、いずれも短期廃絶型の集落形態を示しており、中・後期にわたる遺跡はない。

一帯は狭小な可耕地しかなく、深い谷を擁する丘陵地帯で、その点農業経営上きわめて不利な立地条件を持っているといえる。

また、注目されるべき点は、集落に重なり弥生木棺墓が発見されたことである。所属時期は集落継続幅に納まるもので、その発見は住居群に接して存在する小墓群の存在を示すものである可能性が強い。また高床倉庫跡とみられる掘立柱建物も発見され、小住居群構造を追求するための遺構の組み合わせがあるていど押えられた。

草加部稲荷遺荷

小原Ｂ遺跡と比べ、草加部稲荷遺跡は弥生中期中葉にさかのぼり、後期中葉の土器まで出土している。また、北方丘陵基部に広がる東蔵坊遺跡が中期中葉から後期終末まで存在し、集落の捕えかたとしては、東蔵坊遺跡と一帯と考えられるので、稲荷遺跡は継続型の集落の周辺的様相を呈しているといえる。

出土土器の様相も連続的な変遷をたどれ、また遺構も各期に均等に存在しているように観察される。

その中で注目されるのは、Ｂ地区で長方形竪穴住居状遺構が１棟発見され、中期小住居群構造の１要素に新たな例を付け加えたことである。

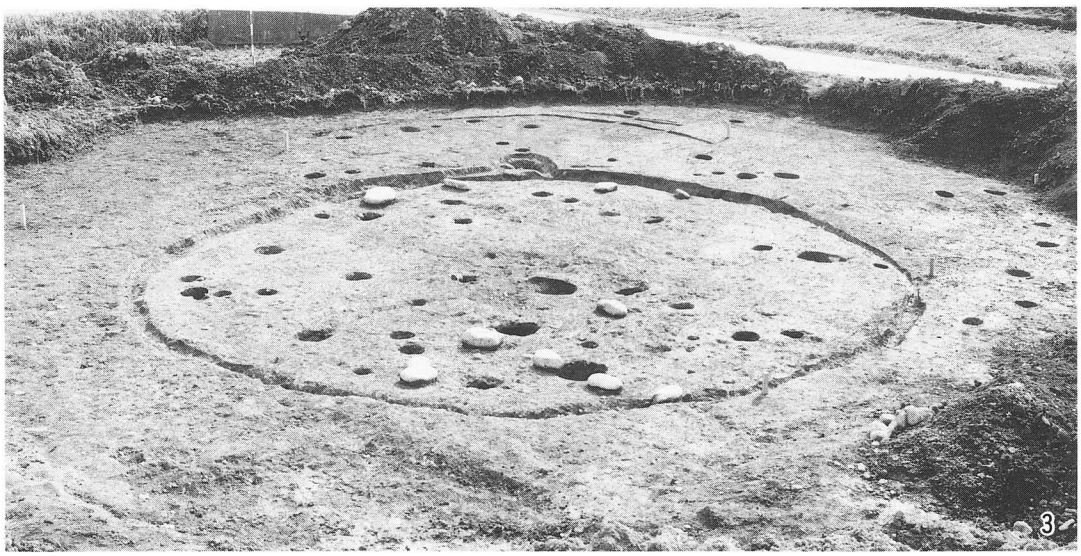
集落立地、周辺遺跡群との相互関係をとらえて、両者の遺構群を評価することは、発見遺構の少なさ、調査面積の少なさに拘らず興味深い内容をもっているといえる。

ごくおおずかみにみれば、稲荷遺跡は継続的な集落の外周的様相を呈し、小原Ｂ遺構は、東方大崎地区の平地に存在したであろう長期継続型集落からみて外周帯のさらに外縁に生産活動を展開した集落と捕えることが出来よう。

1．瓜生原小原B遺跡1号住居跡

2．瓜生原小原B遺跡3号住居跡

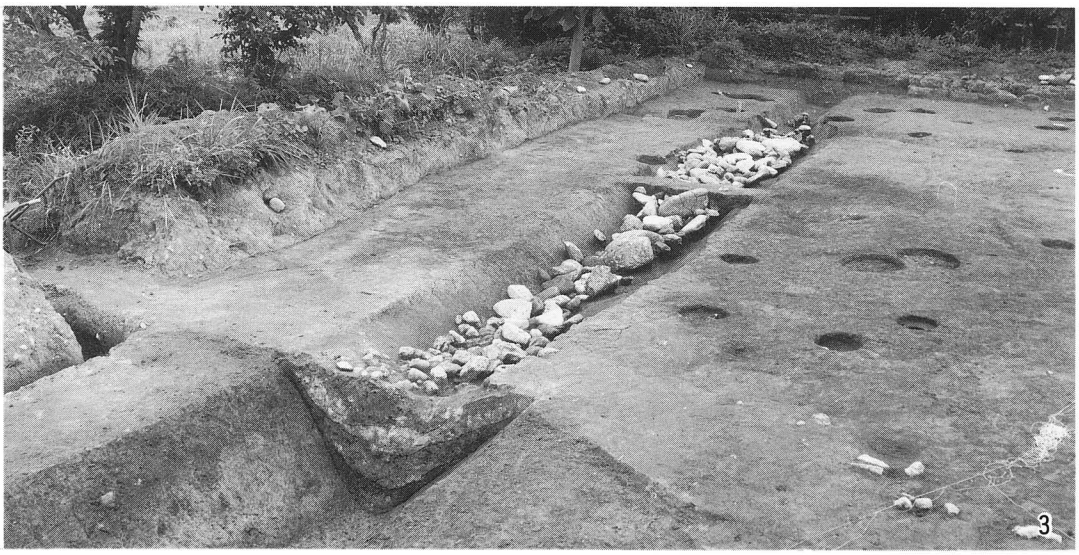
3．草加部稲荷遺跡1号住居跡



1．草加部稲荷遺跡C地区遠景

2．草加部稲荷遺跡C地区５号住居跡

3．草加部稲荷遺跡C地区２、３号住居跡



1．草加部稲荷遺跡C地区 4 号住居跡

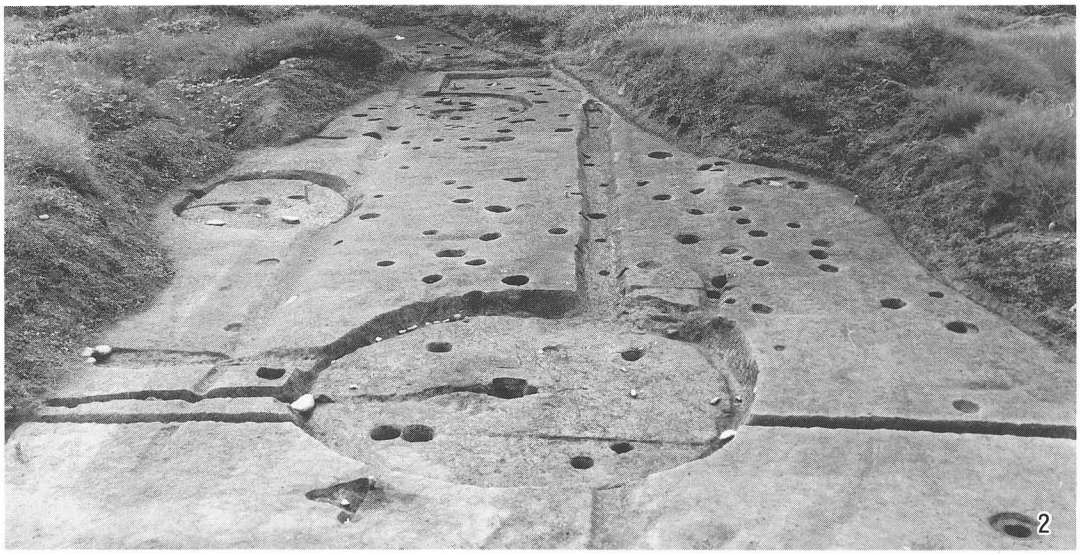
2．草加部稲荷遺跡B-a地区遠景

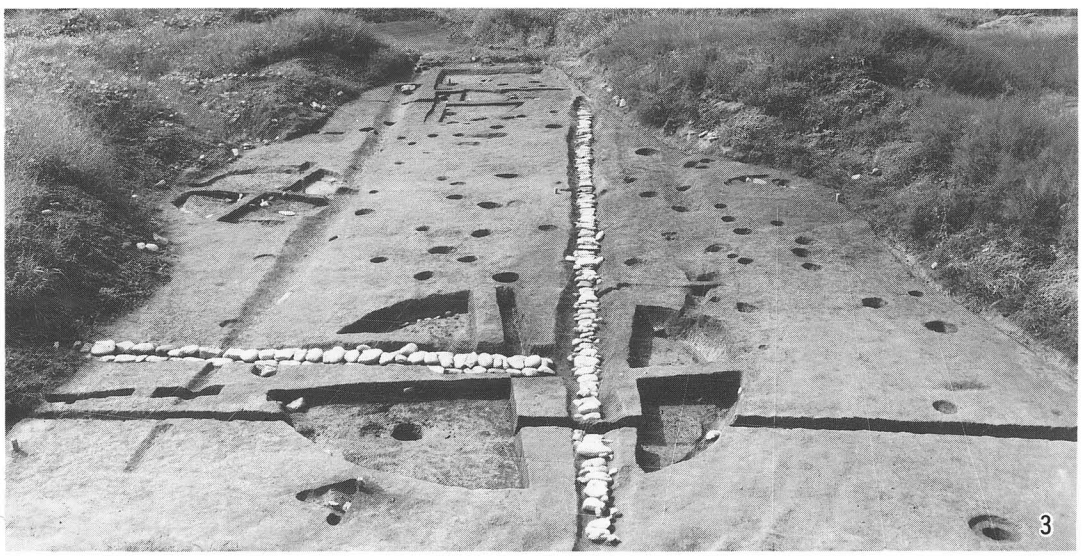
3．草加部稲荷遺跡B-a地区溝 1

1．草加部稲荷遺跡B-b地区遠景

2．草加部稲荷遺跡B-b地区２号住居跡他

3．草加部稲荷遺跡B-b地区１号住居跡





1．草加部稲荷B-b地区コの字形溝状遺構群

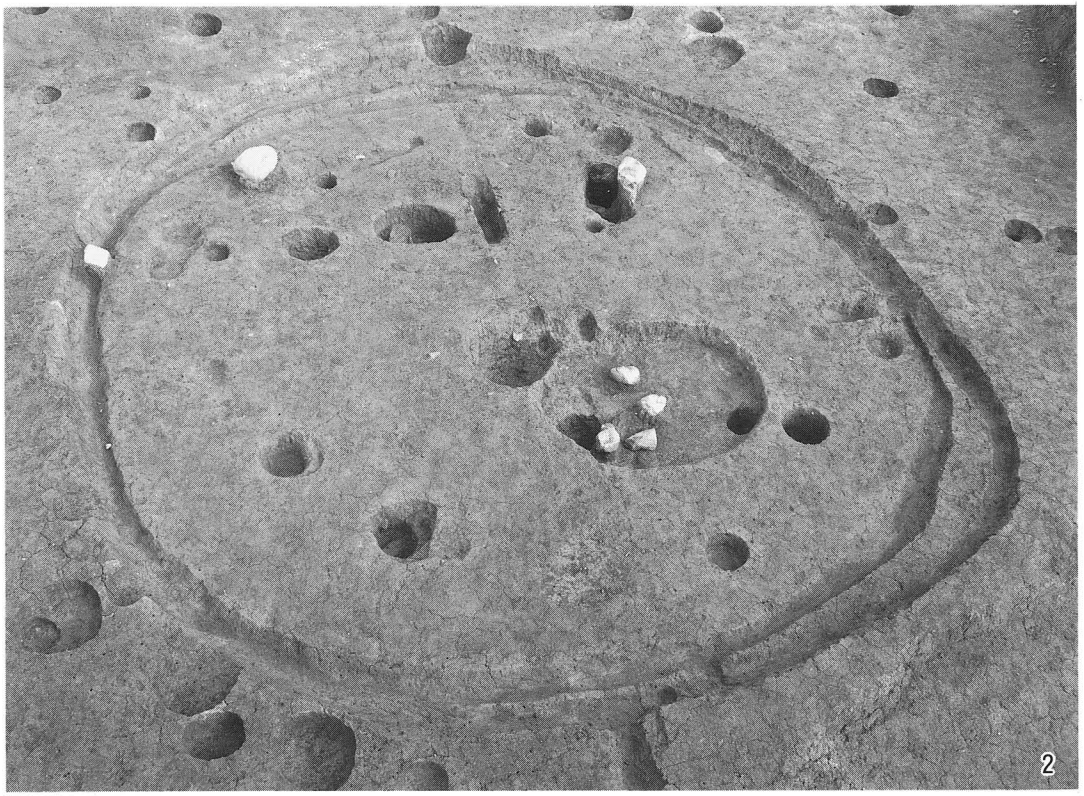
2．草加部稲荷B-c地区遠景と石組暗渠

3．草加部稲荷B-c地区遠景

1．草加部稲荷遺跡B-c地区24号住居跡

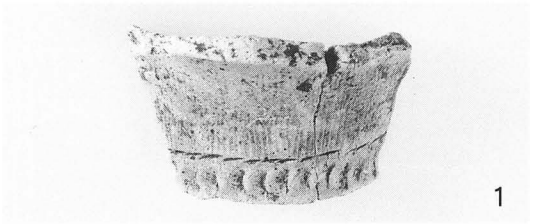
2．草加部稲荷遺跡B-c地区23号住居跡

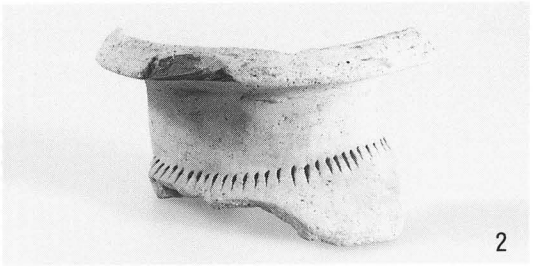
3．草加部稲荷遺跡A地区遠景



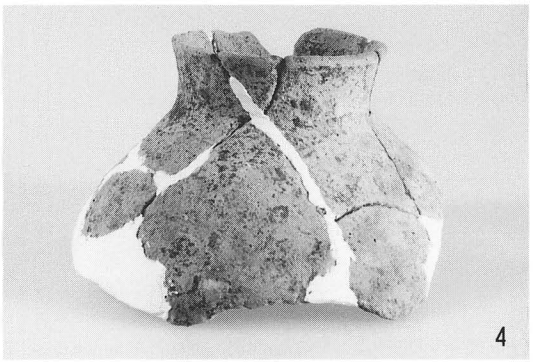
1．草加部稲荷遺跡A地区４、５号住居跡

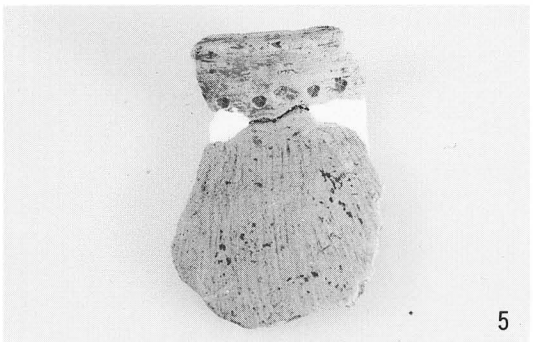
2．草加部稲荷遺跡A地区３号住居跡

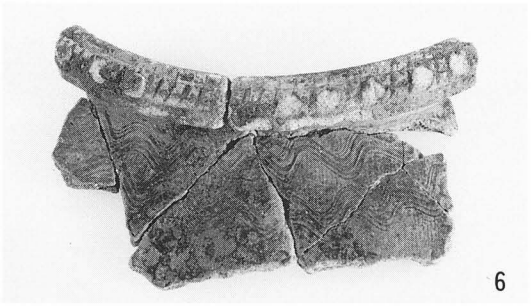

1

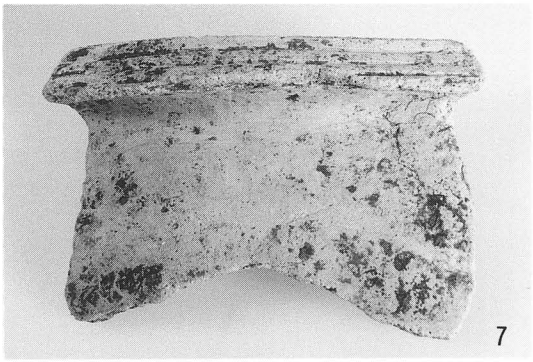

2

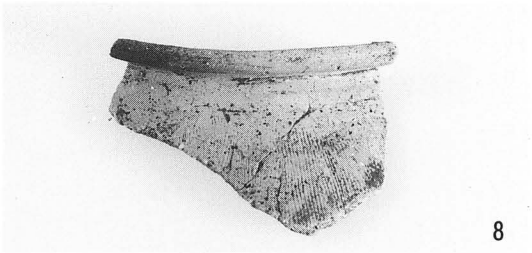
3


4


5


6

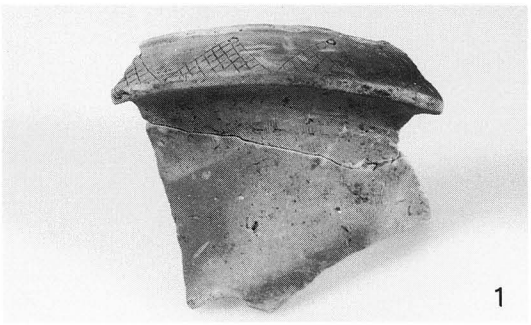

7


8

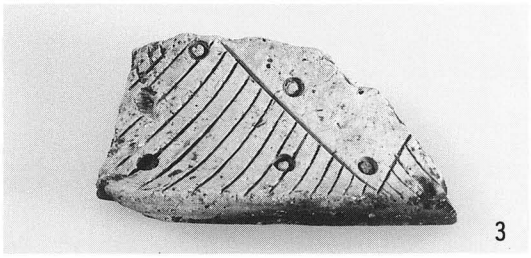
9

10

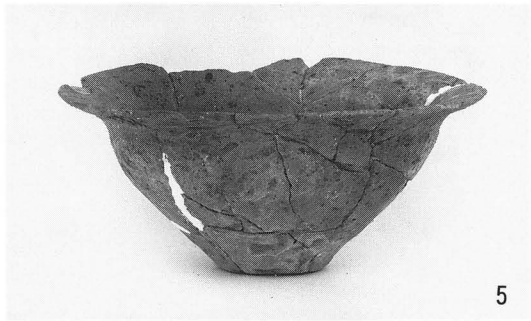
1．Fig. 25-8
2．Fig. 24-1
3．Fig. 25-12
4．稲荷C-a土壙
5．Fig. 27-14
6．Fig. 25-10
6．Fig. 26-21
8．Fig. 26-4
9．Fig. 35-3
10．稲荷C-a土壙


1

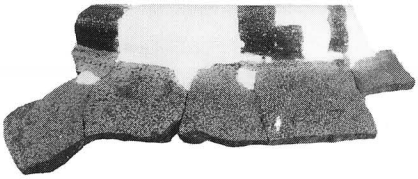
2

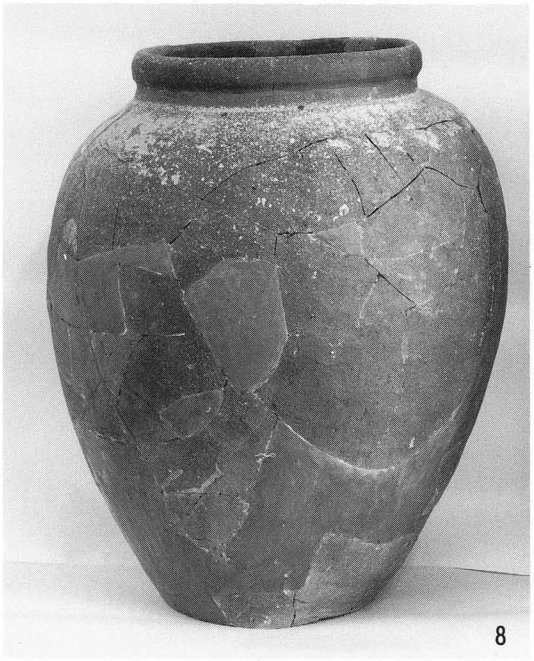

3

4


5

6


7


8

9

1．Fig. 28-20
2．稲荷B-b地区
3．稲荷B-b地区
4．Fig. 32-8
5．Fig. 32-7
6．Fig. 18-7
7．Fig. 18-2
8．Fig. 18-9
9．Fig. 18-9

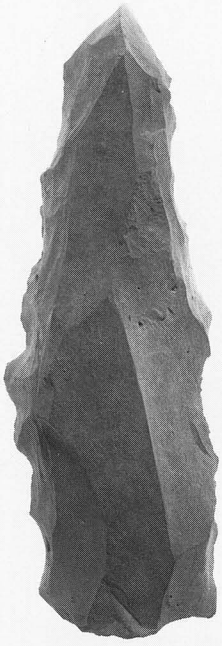


Fig. 30-1

Fig. 30-2

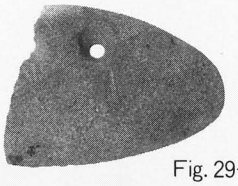


Fig. 29-4

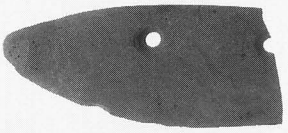


Fig. 29-6

Fig. 29-12

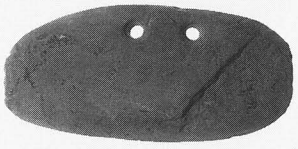


Fig. 29-1

Fig. 29-9

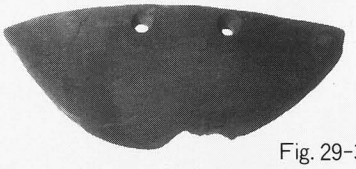


Fig. 29-3

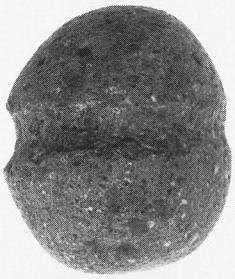


Fig. 29-10

Fig. 29-5

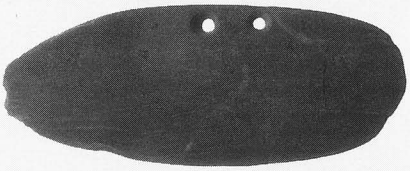


Fig. 29-2

Fig. 29-8

Fig. 29-7

B-b溝8出土

Fig. 30-4

Fig. 30-3

小原B・稲荷遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第35集

1990年3月31日

発行　津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷　美作印刷株式会社
岡山県津山市二階町57